

多摩川上・中流域の動植物方言  
調査及び動植物と人々のかかわり  
についての民俗学的考察

1992年

岡 崎 学  
はむら自然友の会

## 目 次

はじめに.....	1
動植物方言ノート.....	2
名付け親はこどもたち.....	22
まじないと言い伝え.....	25
身近な民間薬.....	29
民俗行事と動植物.....	33
多摩の動植物方言一覧.....	38
協力者・参考文献.....	58・59
あとがき.....	60

## はじめに

東京の母なる川、多摩川。川が何万年にもわたって育んできた大自然の中に数多くの動植物が生きついでている。

広く見れば、東京西部に住む多摩の人々も多摩川が作り出した自然の中に生活していることになる。

多摩川流域に住む人々の生活は、川に魚を求め、山に炭焼きに入り、田畑に鋤をふるった時代を遠い過去のものとし、今や、住環境に大きな変革をもたらした新しい時代を迎えている。

このため、野山や川に代表される自然と人間との関係は、日常生活の上では、希薄なものとなってしまった。

このたびの調査研究では、方言をはじめとして民俗行事や、言い伝えの中に、自然と人間とのかかわりの深さを数多く発見することができ、大きな成果を得た。

今後は、さらに研究を深めるため、各地から寄せられる情報を追加するとともに多摩各地での聞き取りを繰り返し、この調査を補完して価値あるものにしていきたいと考えている。

## 動植物方言ノート

多摩語とも言うべき多摩独特の言葉－方言－がある。今や年寄りの間や、地元住民同士の会話の中でときどき耳にする程度になってしまった。若い人たちの間で面白半分に使われる方言を除けば、日常会話からは、やがて消えて行く運命にある。

動植物の名前は、野山に遊んだ子供たちか、動植物を相手に生業としていた人たちが名付けた場合が多かったが、子供をとりまく環境や、職業の変化、さらには、現代の情報化社会が動植物方言を不必要なものとしてしまった。

今の子供たちは、カブトムシをデパートで買う時代で、日常的に自然の中で遊ぶことがほとんどない。そのため、彼らが虫や鳥に名前をつける機会を失ってしまっている。

大人の場合でも、畑仕事をする人が堆肥の中からカブトムシの幼虫をつまみ出すこともなく、鍬で土を掘り起こすことも耕運機に任せるようになり、土の中に眠っている蝶や蛾の蛹を見かける機会もほとんどない状態である。

今回の調査では、青梅以西、特に奥多摩町や小管村に樹木と鳥に関する方言が多く残っていた。そして、羽村～八王子～立川あたりでは、草や虫の方言を多く聞き取ることができた。また、都心に近くなるにしたがって自然とのかかわりが希薄になり、樹木や草の方言が失せていることも判明した。

それでは、今まで調査した方言の中から木、草、虫、鳥、魚など36種について市町村別に紹介していくこととする。

## アセビ

《ツツジ科》

### 方言

- アセボ (羽村市、立川市、瑞穂町、日の出町)  
アシビ (羽村市、日の出町)  
ブスゴウ (羽村市、日の出町、奥多摩町)  
ウシコロシ (羽村市、日の出町)    ダニシバ (檜原村)  
ハコボレ (青梅市)    アサメシバ (小菅村)  
アゼミシバ・ウジコロシ・ネズミシバ (羽村市)

呼び名が多く、ネズミシバは、サツマイモの貯蔵穴の回りに挿してネズミ除けに、ダニシバは、馬につくダニ退治に使った。

戦後、青梅市の小学校では、子供のシラミ退治に煎じて使ったとのことである。

## イヌツゲ

《モチノキ科》

### 方言

- ダンゴノキ (羽村市、青梅市、府中市、立川市、日野市、日の出町、奥多摩町)  
ダンゴサシノキ(秋川市)    ダンゴサシ (府中市)  
ダンゴバラ (檜原村)    マエダマノキ (府中市)  
マイダマギ (青梅市)    ヘダマ (奥多摩町)

ほぼ多摩全域で小正月に繭玉を挿した木は、イヌツゲ。

ウメ、コナラ、カシなどのほか、多摩川に近いところでは、ヤナギを利用している。

## ウワミズザクラ

《バラ科》

### 方言

ヘッピーザクラ（羽村市）

ションベンザクラ（奥多摩町）

方言では、ウワミズザクラとイヌザクラを区別していない。  
生木を燃やすと水分が出てピーピー、パチパチと音をたてるので、このような名前になったという。

ウワミズザクラとイヌザクラを比べると、花も実も、ウワミズザクラのほうが格が上である。なぜか、イヌの名がつくものには「下等」の意味が込められている。

## クサボケ

《バラ科》

### 方言

シドメ（羽村市、八王子市、多摩市、府中市、青梅市、秋川市、瑞穂町、檜原村）

シドミ（府中市、狛江市）

チドメ（奥多摩町）

木や花よりも果実をシドメとかシドミという場合が多い。草むらに咲く朱色のクサボケの花は、印象的だが、果実は、そのままでは渋くて食べられない。シドメのシには、渋の意味があるようだ。

## エゴノキ

《エゴノキ科》

### 方言

- エゴ (羽村市、府中市、国立市、日の出町)  
ヨゴノキ (羽村市、立川市、秋川市、福生市、日の出町)  
セッケンノキ (羽村市、秋川市)  
シャボンノキ (青梅市、秋川市)  
シャボングサ (檜原村)

有毒植物だが、子供たちは、この実をつぶして泡をたてて石鹼遊びをした。奥多摩町や檜原村では、ウツギをシャボンダマノキと呼んでいる。

初夏、玉川上水の散策路は、エゴノキの花道が続き人々の目を楽しませてくれる。

## タラノキ

《ウコギ科》

### 方言

- タラッポイ (日の出町、奥多摩町、丹波山村)  
タランポイ (日の出町、檜原村) タランポ (日の出町)  
タラッポエ (日の出町) タラッポ (日の出町)  
タラッポウ (小菅村) タランポ (福生市)  
タラノメ (羽村市、青梅市)

山菜の王者と呼ばれるくらいだから、年に一度は食べたいもの。この味は、山に住む人々にとっては、魚の鱈に匹敵したのだろうか。鱈とタラノキには共通点がありそう。

よく似たハリギリを奥多摩方面ではボウダラとか、アクダラとって下等に見ている。

## ニワトコ

《スイカズラ科》

### 方言

- アボヘボノキ (府中市、小金井市)  
カツンボ (清瀬市、国立市)  
ニワツク (奥多摩町)

小正月行事に用いるアボヘボ(粟穂稗穂)の材料は、府中市や、小金井市などの平野部ではニワトコを用い、奥多摩の山地ではヌルデが一般的である。

カツンボは、ヌルデのことだが、清瀬市、国立市ではニワトコ、調布市ではミズキである。

ニワトコは、春、白い花が咲き、夏になると赤い実を結ぶ。

## ミズキ

《ミズキ科》

### 方言

- カギンチョウ (羽村市、青梅市、秋川市、立川市、瑞穂町)  
ミズクサ (羽村市、瑞穂町、奥多摩町、小菅村、他)  
カギッチョノキ(府中市、八王子市)  
カギッチョ (府中市、狛江市) ハシノキ (奥多摩町)  
カツンボ (調布市) ニワトコ (調布市)  
カギンチョ (日の出町) カギッコ (府中市)  
カギンチョノキ(日の出町) カギッコノキ (府中市)  
キンカンボウ (府中市) バッパギンコ (狛江市)  
ミズギ (檜原村) アカンボウ (羽村市)  
カタギ (奥多摩町) アカンボウノキ (羽村市)

子供たちの冬場の遊びで鍵状のミズキの冬芽をひっかけあって遊んだ。



## リョウブ

《リョウブ科》

### 方言

- サルスベリ (奥多摩町、日の出町、檜原村)  
ギョウブ (奥多摩町、小菅村)  
リョウボ (日の出町)  
リョウボウ (奥多摩町)  
ビョウボウズ (奥多摩町)

奥多摩町や小菅村では、ナツツバキをサルスベリという所もある。両者とも木肌が滑らかなので、サルスベリ(百日紅)との共通点がある。

木肌にまだら模様があり、春の芽出しが美しく、茶席などに似合う。漢字で「令法」と書く。

## ネジキ

《ツツジ科》

### 方言

- アカンボウ (羽村市)  
アカンボウノキ (青梅市、福生市、檜原村)  
カマネジリ (羽村市)  
カシオシメ・カシウスミ (奥多摩町)

前年枝が赤くなるのは、ミズキと同じで、赤い棒の木という意味である。冬の雑木林で行う堆肥用の枯れ葉集めを「くず掃き」と称しているが、小正月の繭玉を挿す木としてくず掃きの時にこの枝を持ち帰ったという。

カマネジリは、枝を切るのに鎌がねじれてしまうほど幹が堅いという意味で、カシオシメのカシも堅い樫の意味であろう。

## ホタルブクロ

《キキョウ科》

### 方言

- トッカンバナ (羽村市、昭島市、八王子市、立川市、青梅市、  
秋川市、狛江市、瑞穂町、奥多摩町、日の出町、  
檜原村)
- チョウチンバナ (羽村市、立川市、多摩市、瑞穂町)
- ポッカンバナ (奥多摩町) アンポンタン (多摩市)
- タッタッポウ (小菅村)

ほとんど多摩全域で、トッカンバナと呼ばれている。身近な動植物には、子供たちがつけた名前がたくさんあり、トッカンバナは、その代表的なもので、ローカル色を感じる。

## イタドリ

《タデ科》

### 方言

- イッタンドリ (羽村市、福生市、秋川市、青梅市、昭島市、  
立川市、府中市、多摩市、八王子市)
- イタンドリ (青梅市、奥多摩町、檜原村)
- スカンポ (府中市) スッカカンポ (奥多摩町)

早春、幹の柔らかいところをポキンと折り、皮をむいてまるかじりする。野原で遊ぶ子供たちにとって、格好の水分補給植物だったようだ。

語源は、痛み取りであろう。檜原村のイタンドリが痛み取りに近い言葉である。

戦時中、この葉を用いてたばこの代用品を作ったという話もある。

## チガヤ

《イネ科》

### 方言

ツバナ	(羽村市、府中市、多摩市、昭島市、立川市、狛江市)		
ツバネ	(羽村市、青梅市、秋川市、福生市、瑞穂町)		
ツバメ	(羽村市、立川市、青梅市、秋川市)		
チヤガ	(稲城市、調布市、府中市)		
ボウコ	(府中市)	ツバクロ	(昭島市)
ミゴ	(奥多摩町)	アマナ	(羽村市)
アマンボウ	(羽村市)	アマネ	(羽村市)

ほとんどの場合が白い若穂か、根を食べることから名付けられている。チヤガは、盆行事に使用される場合の呼び名である。

## ノカンゾウ

《ユリ科》

### 方言

オダイリサマ	(羽村市、青梅市、立川市)		
オダイリソウ	(羽村市)	オダイリグサ	(秋川市)
カジバナ	(瑞穂町)	ヘビショウブ	(檜原村)
オカンソ	(府中市)	カンソ	(府中市、多摩市、瑞穂町)

3月、ひなまつりの頃、萌芽期のノカンゾウやヤブカンゾウは、葉の重なり方がひな人形の襟元のように見える。

カジバナは、八重咲きのヤブカンゾウを火事の火に見立てたものであろう。

早春の葉は、食用になるが、多摩の方言に山菜としての名前はない。

## ツメクサ

《ナデシコ科》

### 方言

コゾウナカセ (羽村市、八王子市)

ホタルグサ (府中市、八王子市、立川市、瑞穂町)

杉の葉のようなツメクサは、どこにでも生える強い草で、お寺の小僧が、取っても取っても取りきれないので、泣きがはいるという意味で、「小僧泣かせ」の名がある。

多摩地域では、オノマンネングサをホタルグサと呼んでいるので、ツメクサとの混同があるようだ。

コゾウナカセは、繁殖力の強い植物につけられる名前で、羽村市内では、地域によって、ジシバリ、トキンソウ、ツメクサの3種類にコゾウナカセの名がついている。

## カラスノエンドウ

《マメ科》

### 方言

シビビー (羽村市、府中市)

スビビー (羽村市、秋川市)

スビービー (昭島市)

ピーピーグサ(府中市)

ピーピーマメ(府中市)                      ツルマメ                      (府中市)

マメノキ (府中市)                      マメグサ                      (府中市)

サヤを裂いて豆を取り出し、草笛にする。「スースースビビー」と吹くので、スビビーとか、シビビーと呼ばれる。最近の図鑑では、ヤハズノエンドウの名を採用しているが、やはり、カラスとか、スズメの名に親しみを感じる。

## ハシリドコロ

《ナス科》

### 方言

- ユキワリソウ (日の出町、奥多摩町、丹波山村、小菅村)  
キチゲエグサ (日の出町、丹波山村)  
トコロ (奥多摩町)  
ロート (丹波山村)

早春の山で目にとまる有毒植物で、誤って食べるともだえ苦しみ、走り回るので、キチゲエグサの名がある。

戦後、製薬会社が地元民に呼びかけて大量に採らせたので、ロートの名が残っている。毒と薬は、表裏一体なのである。

## ヒガンバナ

《ヒガンバナ科》

### 方言

- ハコボレ (羽村市、立川市、日の出町)  
テッパレ (羽村市、青梅市)  
テッパナ・テクサレ (羽村市)  
シブトッパナ (府中市)  
ミミダレグサ (立川市)  
ヘビバナ、ヘビマクラ、チチッカブ (奥多摩町)

青梅市では、キツネノカミソリをテッパレ、アセビをハコボレと呼ぶ地域がある。

いずれにしても、有毒植物らしい名前がつけられている。

ところで、稲田とヒガンバナの関係は、弥生時代までさかのぼるのだろうか。なぜか、田圃のあぜ道に真っ赤なヒガンバナが目にとまる。ヒガンバナは、冬季でも葉が地上にあり、球根の所在が分かるため救荒植物としての役目があったようだ。

## ヒルガオ・コヒルガオ

《ヒルガオ科》

### 方言

- チョコバナ (府中市、多摩市、小金井市、瑞穂町)  
アメフリアサガオ (羽村市、八王子市、青梅市、立川市)  
アメフリバナ (立川市、瑞穂町)  
オテンキソウ (青梅市)  
ガジンボウ (羽村市)  
ガズンボウ (瑞穂町)

方言では、ヒルガオとコヒルガオを区別していない。6月の梅雨の時期から咲きはじめるので、方言にも雨とか天気という言葉が入っている。子供たちは、この花を取ると雨が降ると信じていたとのことである。

ガジ(ズ)ンボウの語源は、意味不明である。

## ヨモギ

《キク科》

### 方言

- クサノハナ (羽村市、青梅市、秋川市、八王子市、稲城市、立川市、  
多摩市、国立市、奥多摩町、檜原村、丹波山村)  
モチグサ (羽村市、青梅市、秋川市、府中市、狛江市、立川市、  
多摩市、国立市、奥多摩町、檜原村、丹波山村)  
モグサ (羽村市)

昭和一桁年代以前の人には、クサノハナといい、草餅は、クサノハナモチ。モチグサと呼ぶ人が圧倒的に多く、草餅にして早春の香を楽しむ。

お灸のモグサや、蚊やり、薬湯など、用途の広い薬草である。

## ウスバカゲロウの幼虫

### 方言

《ウスバカゲロウ科》

- ウシッコ (羽村市、秋川市、八王子市、檜原村)  
テクボ・テックボ (奥多摩町、小菅村)  
イチッコ (八王子市、日野市)  
テエチッコ (八王子市) ヒッチャリムシ(八王子市)  
アトビッシャリ (檜原村) ママッコ (檜原村)  
カッコウ (奥多摩町) カッコウサマ (奥多摩町)

神社などの縁の下にある摺鉢状の小さな窪みがウスバカゲロウの幼虫「アリジゴク」の住み処。ウシッコは、牛っ子の意味で、すがた形から名付けられたものであろう。

## ウスタビガの繭

《ヤママユガ科》

### 方言

- ヤマガマス (日の出町)  
カラジッコ (小菅村)

叭(かます)は、塩や石炭などを入れた藁製の袋でウスタビガの繭と口の部分が似ているので、このような名前がつけられたもの。

カラジッコは、木枯らしに揺れている黄緑色をした空っぽの繭から名付けられたものと思う。

## カマキリの卵

《カマキリ科》

### 方言

- カラスノツバキ (羽村市、八王子市、奥多摩町)  
カラスノシズク (奥多摩町)

カマキリの卵は、カラスのつばきとか、カラスのしずくなどと呼ばれているが、この卵とカラスを結び付けたのは、誰なのであるか。やはり、野原を遊び場に使っていた子供たち以外に考えられない。

多摩地域では、カマキリをトカゲと呼ぶところが多く、トカゲをカガミッコという。また、カマキリの腹の中に寄生しているハリガネムシには、モテムシ（元結虫）とか、テマカリ（手間借り）などとおもしろい名前がついている。

## カブトムシの幼虫

《コガネムシ科》

### 方言

- サズカリ (羽村市、秋川市、立川市)  
ダンゴムシ (立川市、小金井市)  
ショウユダル (羽村市、瑞穂町)  
マンジュウムシ(立川市)                      マンジュムシ(八王子市)  
マゴタロウ (小金井市)                      ノケタ (小菅村)

成虫は、テンゴウムシ。カブトムシの角を天狗の鼻に見立てたのであろう。サズカリとは、天狗の授かり物という意味かもしれない。

マンジュウムシ、ショウユダルなどと呼ばれ、麦藁や落ち葉を利用して堆肥を作っていた時代には、堆肥の積み替え時にごろごろと出てきて、まとめて捨てていた時代があった。



## ジグモ

《ジグモ科》

### 方言

- サムライグモ (狛江市、立川市)  
ハラキリグモ (狛江市、立川市)  
カンペイハラキリ (檜原村) フクログモ (小菅村)  
ハラアキレキンザブロウ(日の出町) キンザブロウ (福生市)

木の根元などに細長い袋状の巣を作って住んでいる。子供たちは、クモを捕らえてクモ同士を格闘させたりするが、飽きてくると鋭い上顎でジグモ自身の腹部を切るように仕向けたりして遊ぶ。

## クラブミウマ

《カマドウマ科》

### 方言

- オカマビッチョ (青梅市)  
イッケントビ (福生市)  
イゴ (小菅村)

土蔵や物置小屋など、薄暗いところにいる虫で、体に縞模様があるマダラカマドウマや、模様のないカマドウマなどがある。

オカマビッチョのビッチョは、トカゲをカガミッチョというのと同じで逃げ足の早いことを意味している。

この虫の脚力は、イッケントビ(一間跳び)の名が証明しているようにピョンピョンと跳びはねる。

## アオバズク

《フクロウ科》

### 方言

ホー (羽村市)

ホズッコ (小菅村)

ホーホードリ (小菅村)

アオバズクは、羽村市の鳥に指定された夏鳥である。フクロウの仲間で、姿を見るよりは、声を聞いてその到来を知る。5月の連休ころから鳴きはじめる。

夜間、ホーホ、ホーホと二声ずつ鳴くので、小菅村では、ホーホードリと呼んでいる。

## イカル

《アトリ科》

### 方言

ミノカサホシイ (羽村市)

マメグチ (八王子市)

マメマワシ (小菅村)

「蓑笠欲しい」といって鳴く。鳥図鑑の鳴き方は「キーコキー」と書かれている。これでは漠然としていてはじめての人には、サッパリ判らない。今度、イカルの声をよく聞いてみてほしい。ミノカサホシイと聞こえるはずだ。

鳥の聞きなしは、いろいろあるが、ちなみに、「焼酎一杯グイッ」と鳴くのは、センダイムシクイ。「仰々しい仰々しい」と鳴くのは、オオヨシキリ。最近は「サッポロラーメン、ミソラーメン」と鳴くホオジロもいる。

## コノハズク

《フクロウ科》

### 方言

カッキントン	(奥多摩町、小菅村)
カッキットウ	(小菅村)
ゴキトウドリ	(青梅市御岳、檜原村)
エボ	( “ )

知る人ぞ知る声のブッポウソウ。御岳山では「ご祈祷、ご祈祷」と聞こえるとか。

奥多摩町日原のコノハズクは、カッキントンと鳴くそうだ。御岳山でエボというのは意味不明である。

## ジョウビタキ

《ヒタキ科》

### 方言

モンツキ	(羽村市、秋川市、八王子市)		
バカッチョウ	(奥多摩町)	バカッチョ	(羽村市、秋川市)
ダンゴセイ	(奥多摩町)	ダンゴショイ	(奥多摩町、小菅村)
ヒッカタ	(羽村市)	ダンゴッチョ	(八王子市、他)

冬、シベリア方面から渡って来るといわれている。スズメなどに比べ、人間に対して警戒心もなく、ヒッヒッカタカタッと鳴くので、ヒッカタと呼ぶところがある。

モンツキとダンゴショイは、羽についている白い斑紋を着物の紋付きや、団子に見立てたもの。

縄張り意識が強い鳥で、自動車のフェンダーミラーに写った自分の姿に敵対しているのを見たことがある。こんなことをする鳥なので、バカッチョウと呼ばれるのかもしれない。

## ウグイ

《コイ科》

### 方言

- ハヤ・ホンバヤ (羽村市、福生市、日の出町)  
クキ・クキバヤ (羽村市、福生市)  
クキッパヤ (秋川市)  
アカッパヤ (小菅村)  
ハヤメド (奥多摩町)  
モロコ (小菅村)

多摩川流域でウグイと呼ぶ人はほとんどいない。ハヤが通り名で、ウグイによく似たオイカワ（ヤマベ）は、バカッパヤといい、ホンバヤに対してワンランク下に見られている。産卵期に婚姻色が出て、赤っぽくなったものをアカッパヤとかクキッパヤと呼んでいる。

## カジカ

《カジカ科》

### 方言

- カジッカ (羽村市、立川市、青梅市<八王子市、福生市)  
カジー (八王子市)  
オオマラカジー (小菅村)

カエルのカジカではない。

川魚のカジカは、頭が大きくてグロテスクだが、食しては美味。特に、多摩川上流の丹波川あたりの小形のものが美味しいといわれている。

冬、大きな石の下に小さな卵をたくさん固めて生み付け、泡状なので、泡子になまって「アアコウ」という。

## ホトケドジョウ

《ドジョウ科》

### 方言

オババ・オババドジョウ（羽村市、国立市）

ババス（秋川市） オダブ（日の出町）

オカメドジョウ（五日市町）

かつて、羽村付近の多摩川では、岸辺の石の下には必ずといってよいほどホトケドジョウいた。オババドジョウと呼んで小さな子供の遊び相手程度で食べることをしなかったためか、だれも取って持ち帰ることは、ほとんどしなかった。

ホトケドジョウは、環境指標種とされている。多摩川をオババが住める環境にしてあげたいと願わずにはいられない。

ところで、日の出町のオダブの意味は、ほっそりしたシマドジョウに対して、やや太めなため、つけられたものでオババもオダブも、そしてオカメも女性には嫌われそうな言葉だ。

## サンショウウオ

《サンショウウオ科》

### 方言

- ヤマカジ (八王子市)  
ヤマカジカ (奥多摩町)  
ヤマッカジカ (檜原村、小菅村)  
サンショッカジカ (奥多摩町)

ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオなど、山地の溪流にいるものをヤマカジカとかヤマカジーと呼んでいる。山のカジカという意味で、黒焼きにして食べたり、漢方薬や民間薬として取引されたそうである。

トウキョウサンショウウオは、比較的開けたところにもいるが、ハコネサンショウウオなどは、山奥に棲息している。

## トカゲ

《トカゲ科》

### 方言

- カガミッチョ (羽村市、秋川市、立川市、青梅市、八王子市、  
多摩市、日野市、奥多摩町)  
カガビッチョ (奥多摩町)  
カマギッチョ (奥多摩町)

体の表面が青く光る不気味な小動物で、カガミッチョという名前も体の輝きに起因しているものと思われる。

子供のころ、カガミッチョを見ると手が腐るといって指きりというお呪いをしたことを覚えている。

ところで、多摩地区の広い範囲でカマキリをトカゲと呼んでいるが、物の影に潜んでいて獲物を捕らえる習性から、このような名前がつけられたのではないだろうか。

## ヒキガエル

《ヒキガエル科》

### 方言

オオヒキ	(八王子市)
ゴトウベエ	(八王子市)
ゴトンベエ	(小菅村)
イボゲエロ	(奥多摩町)
イボタ・エボタ	(八王子市)

通称、イボガエルとかガマガエルと呼ばれている。早春、冬眠から目覚めたヒキガエルは、すぐに産卵期を迎える。庭の池などに細長い寒天状の卵を産み、オタマジャクシはオタマッコなどと呼ばれる。

八王子市のゴトウベエは、人の名前を連想するが、意味が分からない。

なお、かえる合戦で有名な八王子市の真覚寺は、産卵期に多くのカエルが集まるので市の天然記念物に指定されているが、最近では、めっきり数が減ってしまったとのことである。

## 名付け親は子供たち

動植物方言の中には、子供たちの遊びを通じて名前がつけられたと思われるものがかなり見受けられる。それが、ままごとであったり、今から見れば動物への虐待でもあったりという感じではあるが、いずれにしても、動植物の特徴をよくとらえたものが多い。

むかし、といっても戦前までの子供たちは、現代の子供たちのようにテレビや、豊富な遊び機器があったわけではないので、ごくあたり前に野山や川をホームグラウンドとしていたため、草、虫、魚などとの出会いがあり、遊び相手としている中で自然と名前がつけられていったものであろう。

ここで、植物を例に、遊びの中から、子供たちが名付けたと思われる名前を上げてみると、次のようなものがある。

### (1) ダルマノミ (アオキ)

女の子のままごと遊びでリングになったのが、ダルマノミ。アオキの雌木には、赤い実がなるので、赤い達磨を連想したものであろう。

### (2) シャボンダマノキ(ウツギ)・セッケンノキ(エゴノキ)

ウツギの葉や、エゴノキの実をつぶして水をつけると泡だつので、このような名前がつけられた。エゴノキの実は、有毒とされているが、子供のセッケン遊び程度では、問題はない。

### (3) ヒイコノキ (ツクバネウツギ)

奥多摩では、羽根つきを「ひいこつき」という。当然ひいことは、羽根のことで、ツクバネウツギは、花後の萼の形が羽



根つきの羽根に似ているので、名付けられたものである。

(4) ピーピーノキ (マサキ)

マサキの葉をピーピーッパという。この葉を口にあてて吹くと、ピーと鳴る。光沢があり、柔らかい葉は、草笛にすると良い音が出る。

(5) カギンチョウ (ミズキ)

ミズキの冬芽の部分は、たいへんもろく、ポロリと折れる。この点を利用して子供たちは、枝をひっかけあって勝負したもので、冬場の遊びとなっていた。

カギンチョとか、カギンチョノキなどと呼ばれるほか、冬に前年枝が赤くなるので、アカンボウとか、アカンボウノキと呼んだのも恐らく子供たちであろう。

(6) メッパジキ (セキショウ)

セキショウの花が咲く直前のものを折り取って臉に当てて目を大きく見せる遊びで、普段と違う顔になるので、お互いに笑い転げて楽しむ。

(7) アカマンマ (イヌタデ)・ミズヒキ (オコワ)

ままごとの材料として赤飯は、ごちそうなので、イヌタデやミズヒキが用いられた。

(8) ビンタボ (オキナグサ)

都内では、全滅に近い植物となってしまった。明治生まれの人が子供のころ、オキナグサの花後の白毛を唾をつけて撫でてビンになれ、タボになれとって遊んだとのことである。

(9) ドロックイ、ツチクイババア(カラスビシャク)

カラスビシャクの花の季節は、麦刈りの時期。刈り取られた麦の切り株のあたりにこのカラスビシャクを見つけると、子供たちは、仏炎包と呼ばれる花の中に土を入れて遊んだ。山の子供たちは、同じようにしてマムシグサで遊んだという。

(10) ピーピーグサ (スズメノテッポウ)

スズメノテッポウとは、少々文学的な表現で、子供の命名ではないようだ。ところがピーピーグサとなると俄然小さな子供が穂をぬきとって、ピーと草笛を吹く様子が思い浮かぶ。

このようにして、植物だけでも簡単に相当数の例を上げることができ、こと昆虫類となると、より身近に、よりローカルな言葉で表現されるようになる。

カマキリは、オタツバカバカ。ウスバカゲロウの幼虫はアトビッサリ。ジグモはカンペイハラキリとかハラアキレキンザブrouなどと呼ばれている。人間の子供が最初に興味を持つものは、植物よりもむしろ昆虫類だということも、周知のとおりで、虫を手はじめにしていろいろなものに興味を示して発展していくのが子供本来の姿だと思う。

かつて子供たちは、彼の山、彼の川をホームグラウンドとして自分たちだけに通じる共通語ともいえる方言を生み出したが、現代の子供たちには、このような体験は、今後も期待できそうにない。

## まじないと言ひ伝え

悪事や災難などから免れるために神仏を祈るいわゆる神頼みに類するものとしてまじないがある。動植物を媒体とした「まじない」の多くは、単なる迷信に過ぎないものばかりで、こと子供の世界では、他愛ないものが多い。

例えば、ごく一般的なものとして、メメズ（ミミズ）におしっこをかけるとオチンチンが腫れると信じていた子供たちは、そのような時にミミズをどぶの中から捜し出して井戸へ行ってポンプをがしゃがしゃ動かして水をくみ出し、そこへミミズを流したという。

また、遊んでいる最中にカガミッチョ（トカゲ）を見て、指さすと指が腐るといって「手をきる」という動作をしたり、大人の場合でも雷が鳴ったら線香を立てて蚊帳をつって入り、クワバラマンザイ、クワバラマンザイと唱えるなど、いろいろなまじないが伝承されている。

青梅市の一部で、土用の丑の日の行事としてアジサイの花を門口へさすと魔除けになるというが、かつては、広い範囲で行われていたものが、細々と伝えられているのかもしれない。なぜなら、現に中野区内の上高田の旧家では、土用の丑の日にアジサイをとって一年中玄関につるしている家が一軒あるから。

なお、ここでは、まじないと言ひ伝えを綿密に区別せず、採集したものを羅列しておくにとどめ、言葉の意味や、云われについては、新たな研究課題を設けて別の機会に譲りたい。

### (1) ビワ

ビワは、うなりごとを聞いたがるから植えない。しかし、その家の鬼門の方角に植えると魔除けになる。(羽村市)

## (2) ヘビ

ヘビの抜け殻を見たり、ふところにいれると金がたまる。ヘビの夢を見るとよいことがある。部屋の中で傘をさすとヘビが天井から落ちてくる。(日の出町)

## (3) ミズキ

新築の際、ミズキの小枝を半紙でくるみ、壽という字を書いて麻糸でくくる。それを棟木の両端に近いところに結び付けておく。家の上部にミズキ(水)があるのでその家は火事にならないという。火難除けのまじないである。(府中市)

正月三が日だけは、その家の長男が削って作ったミズキの箸でなければならない。(調布市)

## (4) アマチャ

アジサイの変種とされているアマチャを煎じたものが4月8日のお釈迦様の日に飲まれるいわゆる「甘茶」である。

当日、寺からいただいてきた甘茶を家のまわりに少し撒いておくとナガムシ(ヘビ)除けになる。この甘茶を残しておいて毒虫に刺されたときにつけると腫れが引く。また、甘茶で眼を洗うと眼病が治るとか、甘茶で墨をすって字を書くと字が上手になる。

なお、この日、「千早ふる卯月八日は吉日よ かみさげ虫を成敗ぞする」と半紙に書いて、便所に貼った。(狛江市)

## (5) ナズナ

七草粥に入れるナズナを残しておき、朝湯からあがって爪につけると風邪をひかない。(青梅市)

## (6) ウマ

12月1日を馬の正月とか、馬の節句といい、馬の労をねぎらう意味で馬にボタモチを食べさせた。この日、オオヒキガエルがボタモチを背負って出雲詣でに行くという。

この日は、朝のうちにモチを食べ、食べないうちは橋を渡ってはいけない。早暁、川へ行き、お尻を水に浸してくると冬中風邪をひかない。(八王子市)

## (7) カキ・クリなどの果樹

子供たちが、小正月行事として果樹の幹を鉋で叩きながら、「こらこら、柿の木、なるかならぬか、なると申せ」などと唱えて、果樹の実つきをよくしようとしたまじない。(稲城市)

## (8) ナス・キク・マメ

大晦日の晩、いろりて借金ナス(済す)がら、いいことキクがら、マメに暮らすようにとそれぞれの植物を燃やした。同じように元日にも燃やした。(福生市)

元日の朝、年男が里芋や大根、人参などが入った汁物を煮るとき、豆柄は忠実(まめ)、菊柄は良いことを聞く、茄子柄は借金をなす(返す)ので、燃やした。(多摩市)

## (9) ニワトコ・ヌルデ

ニワトコで「四十郎兵衛」というものを作り堆肥小屋に挿したり、ヌルデをカツノキと呼んで、あぼへぼを作り畑に立て、豊作祈願のまじないとした。(昭島市)

1月13日、ヌルデの幹を50センチくらいに切り、上部を斜めに削り、男女の顔を書いて門松が置いてあった所に立てかけ、正月を迎える。これは、山の神につかえる仙人が正月の祝いに山を下ってきたときの杖だという。(丹波山村)

## (10) アセビ

6月1日を満石（まんごく）ついたちといって、作物に虫がつかないようにと畑にアセビの枝を挿す。（奥多摩町）

圧倒的に植物が多いが、その中でも、ミズキや、ヌルデは、生長が早い樹木で、特にヌルデに関しては、山野にあって他の樹木の邪魔になるだけで、炭にもならず、材としての価値はないので、他人の山に入って切っても差し支えないとされていたという。

ここでは、各市町村ごとに大同小異の行事や習慣が伝承されているが、地域性などを考慮して代表的なものにとどめた。

大自然の中で暮らす人々の素朴な願いと生活の知恵とが結びつき、このような行事、習慣、まじないごとなどが子々孫々受け継がれて来たのであるが、果たして21世紀を迎えるまで継承されていくかどうか気になるところである。

## 身近な民間薬

民間薬の歴史の中で最も長く愛用されてきたのは、動物ではミミズ、植物ではドクダミがある。効用の点では、ミミズに軍配を上げよう。ドクダミについては、現在でもどくだみ茶あり、どくだみ飴まで商品化されていることから、人気が先行している感がある。つい、何年か前まで、紅茶キノコやら、アマチャヅルチャなど一時的に話題になって、消えて行ったものは数知れない。やはり息長く利用されて来たものには、それなりの薬効が評価されているということだ。

今回の動植物方言調査の中で耳にした話題性のあるものをピックアップしてみよう。

### (1) ミミズ

多摩地区では、どこへ行ってもメメズ。子供が急に熱を出したとき、これを煎じて飲ませれば、たちどころに熱が下がること請け合い。こんなに効くものだから、ごく普通の薬局にも置いてある。ただし、あのぬるぬるしたミミズを思い出し、どろどろの液体を見たら、ちょっと飲む気になれない。しかも、煎じてふやけたミミズの原形など見られたものではない。

これらを克服してこそ、完治に到ると思えば、良薬は口に苦しと観念するしかないのである。

### (2) ドクダミ

またの名をジュウヤク。十の薬効があるという。ドクダミには、緩下剤の働きがあることから、便秘を解消することにより、肌の安定化に効ありとされている。

一説に、ドクダミは、馬の病気に十の効能があるので、十薬と

もいわれているが、あの体の大きな馬にさえ効くのなら、人間にも効くに違いない。

多摩地区では、6月の花の時期から土用にかけて採取し、陰干しにして用いられている。

### (3) ゲンノショウコ

現の証拠というほど、効き目があるかどうかは、別として、方言にリビョウグサ（罹病草）とか、ジビョウグサ（持病草）という言葉があるくらいだから、健康茶としての飲用を奨める。

ゲンノショウコは、ドクダミほど強い植物ではないので、数量に限りがある。その上、アメリカフウロやニリンソウと間違えられたりするので、要注意。

### (4) センブリ

ゲンノショウコ以上に希少植物となってしまった。千回煮出してもまだ苦いという胃薬としての効能から一般にも良く知られた民間薬のひとつだが、今は製薬会社の畑で栽培されている。

### (5) ハシリドコロ

戦後間もなく、ある製薬会社が奥多摩の沢に自生しているハシリドコロに目をつけて毎年、大量に採取したという。このため、奥多摩では、この草をロートと呼ぶ。

ハシリドコロは、春の若葉がみずみずしいので、山菜採りに入った人が知らずに食べて幻覚症状を訴えて病院にかつぎ込まれることがある。トコロのような根で食べると走り苦しむので、ハシリドコロと名付けられた。



## (6) サル

奥多摩町で炭焼きが盛んに行われていたころの話。鉄砲でサルを打ち、その頭を粘土でくるんで炭を焼くときに一緒に焼いたという。八王子方面から買いに来る人がいて、産後の肥立ちが悪い人の薬だといって良い値段で売れたとのことである。

漢方の専門家の話によると猿頭霜といって脳腫瘍など、首から上の病気一切に効くという。今、漢方薬店で売っているのは野生のサルではなく、肉をとったあとのウサギの頭とか。兎頭霜とはいわず、これでも効くのだろうか。

## (7) ホトトギス

ホトトギスは、奥多摩町や小菅村では、ジフテリアの特効薬として高く売れた。ホトトギス一匹が炭一俵に相当したという。

小菅村での話では、ホトトギス、カッコウ、ジュウイチなどは、いつも同じ枝にとまって鳴くので、鉄砲で打ち易かった。ホトトギスの丸焼きは、体が金色に輝き、その美しい色は忘れられないとのことである。

## (8) サンショウウオ

ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオの区別なく、丸焼きにして食べたという。強壯薬でもあり、山間部の人々の主要な蛋白源でもあった。

## (9) マツブサ

つる性の落葉樹で、つるを乾燥させたものをゴクノイと呼んで風呂に入れた。腰痛に効いたという。

檜原村では、マツブドウと呼んで、屋根葺きの時にこのつるを用いて縛ったが、乾燥するに従い針金のように丈夫になるということである。

## (10) クリ

山でうっかりウルシに触り、かぶれるおそれがあると思ったら、ただちにクリの葉をもんで患部に擦り込んでおくこと。ウルシかぶれの前兆は、患部の発疹と目のまわりが痒くなることで分かる。完全にかぶれてしまったら、乾燥したクリの葉を煎じて飲むと治る。

## (11) クズ

クズは、良質の澱粉を含んでいるだけでなく、風邪薬としての効能が認められている漢方薬「葛根湯」の原料である。

いま、アメリカでは、家畜の飼料として日本から輸入したクズがはびこり、困っているとか。

民間薬は、多くの方が、経験を通して効能を確認している。ほとんどの場合、副作用が少ない。即効は期待できない。等々の特長を有しているが、今の若い人には、敬遠されがちで、衰退は時間の問題といえよう。しかし、副作用がないことから長期にわたり常用することができるという点も見逃せないものでいつの日か、見直され、脚光をあびることに期待したい。

## 民俗行事と動植物

多摩の民俗行事の多くは、ほとんど12月と正月に集中しているの、その中から代表的なものに焦点を絞って調べてみた。

### (1) 馬の正月・川びたり

12月1日をカアビタリといった。馬の正月とか、馬の節句ともいい、この日の朝、餅をついて「水神様にあげ申す」といって床の間にあげたり、多摩川へ行って「おとたちばな姫におまかせ申す」と唱えて川に流した。この一年よく働いた馬にも大福モチを食べさせたという。(羽村市)

川びたりといって、この日が馬仕事の終了日で、馬をきれいに洗って餅をついて祝った。(奥多摩町)

午の正月とか、カワビタリといって、この日、川に行つて尻を浸して清めると水難にあわないという。カワビタリ餅というぼた餅を作った。(昭島市)

12月1日をカワビタリといったが、行事は残っていないし、何をしたかも分からない。(調布市)

水神を祭る行事で、餅またはぼた餅を作った。(稲城市)

川びたりの朔日、馬の節句、馬の正月といい、馬にぼた餅を食べさせる。この日、オオヒキガエルがぼた餅を背負つて出雲詣でに行くという。早暁、川へ行って尻を水にひたしてくると風邪を引かないといわれている。(八王子市)

12月1日をカワビタリという言葉が残っているのみで、内容については、伝承されていない。(府中市)

カアビタリ、馬の正月といい、餅を1~2臼ついた。馬を川で洗い、赤い布で飾つたという。夜は、白米の飯に煮しめ、魚などのご馳走を食べた。(日の出町)

12月1日を川びたりの日、馬の正月、馬の節句などといっ

て収穫の終わる時期を選んでぼた餅を作り、まず馬に食べさせた。馬を川に引き入れて脚を洗ってやった。場所によっては、カアビタリだから川に入っては行けないという。子供たちは、川へ行って尻をまくって水につけてこいといわれた。川水をつけると風邪をひかないともいわれた。(日野市)

稲刈りも終わり、働いた馬に感謝の意味でぼた餅を作って馬にあげた。「川に足をつっこめ」といわれたと。(立川市)

12月1日という日にちの設定にどんな意味が込められているか。馬と川のかかわりは何か。馬とボタモチの関係。川へ行ってお尻を水に浸す理由は何かなど。馬の正月の意味についての手掛かりを聞き取り調査と市町村史誌に求めたが、納得いく回答に出会うことができなかった。しかし、正月という言葉に休日、仕事をしないで、のんびり過ごすという意味があるように思えた。それは、中野区鷺宮付近から田無市にかけての農家では、雨降りの日を「おしめり正月」といっていることから理解できる。また、羽村市には1月に「からすの正月」というのがあり、カラスに御馳走を与える行事があったという。

馬の正月というのは、一年間よく働いた馬への感謝といたわりから、人間にとっても御馳走であるボタモチや大福餅を馬に食べさせたものである。

江戸時代から明治年間までは、輸送手段は、もっぱら馬に頼っていたので、馬に関する行事が多く残っているし、馬頭観音などを道端に見かける機会もかなりある。

羽村市の寺坂の途中に馬の水飲み場が文化財として残されているが、馬と水の関係は、飲み水だけでなく、川のある地域では、仕事を終えると身体を洗う場でもあり、川と馬は切っても切れない関係にあったようだ。

## (2) 七草

この日の朝、セリ、ナズナ、ダイコン、ニンジン、ネギなどを入れた七草粥を作った。醤油味のオジヤにした。

七草を刻むときの唱え言葉は「七草ナズナ 唐土（もろこし）の鳥が日本の国に渡らぬ先に ストントン」などと唱える。

また、七草粥の汁をつけて爪の初切りをしておけば、いつ切ってもよいとされ、一年中病気にかからないともいう。

この日、茶碗に水とセリを入れて神棚に供えて拝み、この水に爪を浸して「セリツメ セリツメ」と唱えながら、爪を切ると爪が丈夫になるという。（日の出町）

七草粥は、ナズナ、ネギ、ダイコン、ホウレンソウ、ニンジン、ゴボウなどを入れたお粥か、オジヤだった。「七草ナズナ唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先にヤトトンヤトトン」と唱えながらナズナを刻む。

七草までは、オジヤを食べてはいけない。七草までは、ご飯に汁をかけてはいけないなどという家がある。（立川市）

七草刻みの唱え言葉は、地域によって多少のちがいがあ  
る。「七草ナズナ 唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先に ストントン」  
「七草ナズナ 唐土の鳥と日本の鳥と出合わぬうちに ストント  
ン」  
「七草ナズナ 唐土の鳥が日本の国へ渡らぬように たたき納め  
ろ」

爪を切るとき、ナズナのゆで湯に爪を浸すか、ゆで湯を爪につけてから切ると爪離れがしない。（日野市）

粥の中に春の七草を入れて食べるだけで、行事としては、あまり重要性はないようだ。（奥多摩町）

6日の夕方、七草たたきをする。「七草ナズナ 唐土の鳥と日本の鳥と飛び交ううちに ストントン」と唱えながら、すりこぎや、包丁のミネでまな板をたたく。七草をたたいて出た汁を

爪につけるとよいといわれている。(青梅市)

1月5日にセリ摘みをして、汲みたての水で洗い、コップに水ごと大神宮様に上げておく。翌日、セリの水浸けに五本の指を入れて、セリツメセリツメと唱えながら爪切りをする。7日、ナズナ、ネギ、コマツナ、ダイコン、油揚げなどを入れた七草粥を作る。(日の出町)

七草粥の中にシャミセングサ(ナズナ)を入れた。ないときは、ホウレンソウで間に合わせた。この粥の中に神仏に供えた餅をおろして焼いて入れた。「七草ナズナ唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬうちに ストントントン」と唱える。爪を切るとき、七草をつけて切ると手を切らないという。(府中市)

7日の朝、餅やナズナを入れた米の粥を作り、七草粥とも七草雑炊とも呼んでいた。唱え言葉は「唐土の鳥と日本の鳥が渡らぬ先にストントントン」。この日、七草粥を食べると、その年、病気にかからないという。(調布市)

七草粥は、大抵の家で食べた。ナズナのことを七草と呼ぶ。七草は、まな板の上で「七草ナズナ 唐土の鳥の日本の土地へ渡らぬ先に 七草たたけ」と唱えながら包丁を使う。七草に浸した手足の爪を切ると爪が痛まないという。(狛江市)

朝食の粥に春の七草をいれた雑炊を作る。ダイコンや野菜類を入れたオジヤを作り、七草粥と呼んでいた。地域によっては、七草雑炊という。(八王子市)

醤油で味付けしたオジヤを作った。4日にやるところもある。中身は、セリ、ナズナの外、アツキ、コマツナ、アブラゲ、ゴボウ、ダイコンなどであった。(福生市)

七草のオジヤを作る。セリとナズナは必ず入れ、何かみつくるって七色炊き込んだ。七草を刻むとき「七草ナズナ 唐土の鳥と日本の鳥と日本の橋を渡らぬうちに ストントントン」と唱えた。(羽村市)

以上、馬の正月・川びたりと七草について、市町村別に類似点、相違点などを調査してみた。方や、七草のように今でも行われているものに対して、馬の正月は、絶えて久しいため、情報量が少なく、十分な結果を得るまでには至らなかった。

馬の正月と七草を比較すると、都心に近い所では、七草行事についての伝承がよく残っていたが、馬の正月については、ほとんど伝承されていなかった。

馬の正月行事に関しては、羽村、青梅などの多摩川に面したところで聞き取ることができた。

馬の正月以外にも、カラスの正月とか、節分の焼きかがし作りの唱え言葉など、ユニークなものとの出会いもあり、多摩地区に残る方言を追究しながら、民俗学への世界まで、垣間見る結果となり、この上ない満足感を味わうことができた。

以上

## 多摩の動植物方言一覧

—木—

和 名	方 言 名
アオキ	アオキシバ(日)、ダルマノミ(日)
アオハダ	ヒトツバ(奥)
アサダ	アカザ(奥)、ツキデッポウ(菅)
アカシデ	アカノロ(奥、日)、アカメノロ(日、檜)、ソロ(八)
アカメガシワ	オガラ(八)
アキグミ	アズキグミ(羽)
アケビ	アケビ(羽、秋、奥、檜、八、立、丹)
アスナロ	ヒバ(日、奥)
アセビ	アゼミシバ(羽)、ウシコロシ(羽、日) アシビ(羽、日)、ブスゴウ(羽、奥、日) ウジコロシ(羽)、ネズミシバ(羽) アサメシバ(菅)、アセボ(羽、立、保、瑞、日) ダニシバ(檜)、ハコボレ(青)、シキビ(福、日)
アブラチャン	ズサ(奥、檜)
アラカシ	アカガシ(檜)
イタヤカエデ	ヘエタ(八、奥、菅)、ヘヤタ(日、檜)
イチイ	アララギ(奥)
イヌガヤ	ヘダマ(奥)
イヌザクラ	シヨンベンザクラ(奥)、ヘッピリザクラ(羽)
イヌシデ	シロノロ(奥、日、檜)、アノノロ(日)、ソロ(奥)
イヌツゲ	ダンゴノキ(羽、福、青、日、府、立、野、奥、檜) ダンゴサシノキ(秋)、ダンゴサシ(府)、ヘダマ(奥) マエダマノキ(府)、ダンゴバラ(檜)、マイダマギ(青)
イヌブナ	クロブナ(奥、檜、日)、ムラダチ(奥)



和 名	方 言 名
ウグイスカグラ	グミ(羽、八、青、立)
ウダイカンバ	ウデエ(奥)
ウツギ	オツギ(羽、秋)、シャボンダマノキ(奥、檜) サキヤアギ(国)
ウラジロガシ	シロガシ(檜)
ウリカエデ	ユワウリ(奥)、ウリノキ(檜)
ウリハダカエデ	ウリノキ(奥)
ウワミズザクラ	シヨンベンザクラ(奥)、ヘツピリザクラ(羽)
エゴノキ	ヨゴノキ(羽、立、秋、福、日)、エゴ(羽、府、国、日)、 シャボンノキ(秋、青)、セツケンノキ(羽、秋)、 シャボングサ(檜)
エビズル	エブズル(奥)
オノオレカンバ	ミネバリ(奥)
オヒョウ	ナメズク(奥)
カシワ	オカシワ(青、羽)、カシワボ(檜)、カシワモチ(福、日)
ガマズミ	ヨソドメ(羽、青、秋、奥、日)、ヨソド(檜)、ヨツドメ・ヨツドドメ(瑞)、ヨツド(奥)、ヨソヅ(奥)、 ドドメ(猫、多)
カマツカ	ウシコロシ(羽、八、檜、日)
キハダ	サンゼンソウ(奥)
キブシ	マメンブシ(奥)、マメブシ(檜)
キョウチクトウ	ボンバナ(羽、瑞)
クサギ	トウノキ(八、奥)
クサボケ	シドメ(羽、福、八、多、府、国、青、秋、瑞、檜、日)、 チドメ(奥)、シドミ(府、猫)

和名	方言名
クズ	クズフジ(丹)、クズマク(羽、青、秋)、クズバ(檜)、カズラ(奥)
クヌギ、コナラの実	ジندانボウ(羽、秋、立)、ジندانボ(田、多)
クマシデ	タニガシノロ・ウバアノロ(奥)、アノロ(八、日、奥)
クマノミズキ	カタスゴ(奥)、カタソゲ(八、檜)
クロモジ	ヨウジノキ(羽、立、青、日、檜)、クロモンジ(八、檜、日、奥、菅)
クワ	クワゼ・クワゼンボウ(羽、立)、クワデ(羽、国、多、秋、福、檜)、クワゼ(多)、クワデンボウ(羽、秋、福、青、瑞、多)
クワの実	ドドメ(羽、府、多、青、昭、秋、立、福、保、国、瑞、檜、奥、日)、ドドミ(府)、クワイチゴ(奥、丹)、クワドドメ(多)
ケンポナシ	ケンポロ(奥)
コウゾ	カズ(奥、丹)
コウヤボウキ	ハギ(八)
コシアブラ	イモギ(奥)
ゴシュユ	ゴシヨノキ(羽)
コバノトネリコ	フジキ(日、檜、菅)
サイカチ	ガラギッチョ(秋)
サルスベリ	ハダカギ(羽)、オボロ(青)
サルトリイバラ	タマンバラ(国)、マンジュツパ(八)
サルナシ	スイトウノキ(檜)
サワグルミ	カルメ(奥、菅)

和名	方言名
サワシバ	サアシバ(奥)、ウバアゾロ・ババアゾロ(奥)、ヤマシバ(檜)
サワラ	バリバリ・バリバリノキ(青、羽、福)、バチバチ(福)
シキミ	コウノキ(羽、立、福)、シキビ(福)、コウノハ(青)、コオツパ(福)
シナノキ	ナメズク(奥)
シャクナゲ	シャクナンギ(奥)
シラカシ	アオガシ(檜)
タカノツメ	イモギ(奥)
タマアジサイ	サワフサギ(日、奥、檜)
タラノキ	タラッポイ(奥、日、丹)、タラノメ(羽、青) タラッポ(日)、タラッポエ(日)、タラッポウ(菅) タランポ(八、日、福)、タランポイ(日、檜)
ダンコウバイ	イワズサ(奥、檜)
タンナサワフタギ	イシコリ(檜)
チドリノキ	アラゴ(檜)
チャボガヤ	ヘダマ(奥)、イスガヤ(奥)
ツクバネウツギ	ヒイコノキ(奥、菅)、マメツピイコ(菅)
テツカエデ	アラメ(奥)
ナツツバキ	サルスベリ(奥、菅)
ナツハゼ	ハチマキブドウ(羽)
ナワシロイチゴ	バライチゴ(羽)
ナンテン	ナリテン(羽、秋、瑞、立、国)、ナルテン(檜)
ニワトコ	アボヘボノキ(府、小)、カツンボ(清、国)、ニワツク(奥)

和名	方言名
ヌルデ	オッカド(丹)、フシノキ(丹、奥、日、檜)、カツノキ(羽、秋、青、日、丹、檜、八、奥、稻、菅)、シヨウノミ(羽)、シオノキ(檜、八、日)、カツンボイ(稻、府、多)、カツンボウ(檜、菅)、オカドンボウ(奥)、カザウルシ(多)、ヘエカキボウ(奥)、カツンボ(羽、秋、多、日)、カツンボウ(羽、八、多、檜、日、奥、菅)、カツデンボウ(府)、ノウギ・ゴマギ(檜)、ニンギョウノキ(奥)、チャンギリ(日)、チョンギリ(青)、アボヘボノキ(保)、シヨツパンノキ(日)
ネコヤナギ	ネコジャラシ(立、青、瑞、秋、檜)、ネコザラシ(羽)
ネジキ	アカンボウ(羽)、アカンボウノキ(檜、青、福)、カマネジリ(羽)、カシオシメ・カシウスミ(奥)
ネムノキ	ネブタ(羽、八、多、立、福、日、檜、奥、菅)、ネブタノキ(立、福)、オジギソウ(青)
ノブドウ	カガエビ(府、多)、カガイビ(多)、カガコビ(多)、カッテエビ(菅)
ハクウンボク	ヒトツバ(檜)
ハナイカダ	ママッコ(日、檜、奥、丹、菅)
ハリギリ	ボウダラ(奥、菅)、アクダラ(八、檜、奥)、セン(日、奥)、センノキ(日)
ヒイラギ	ヒイラゲ(羽)、オニオドシ(奥)
ヒノキ	バリバリ・バリバリノキ(青、羽、福)、バチバチ(福)
ビワ	ビヤ(羽)
フサザクラ	メメズツキ(奥)、メメズギ(檜)
フジ	マフジ(丹)
ブナ	シロブナ(奥)、ホンブナ(奥、檜、日)
チチブドウダン	アズキツツジ(奥)

和名	方言名
マサキ	ピーピーノキ(羽)、ピーピツパ(秋、瑞、立)、ピーピークサ(秋)
マタタビ	ネコジャラシ(奥)
マツの実	マツッコロ・マツツポグレ(羽)、マツッコゴレ(瑞)、マツツポグリ(羽、福、八)、マツカサ(羽、秋、瑞)
マツブサ	ゴクエビ(丹)、ゴクノイ(奥、檜、菅)、ゴクノエ(菅)、マツブドウ(奥)、マツフジ(日)
マメガキ	アマメ(奥)
マユミ	マエミ(奥)
ミズキ	カギッチョ(府、狛)、キンカンボウ(府)、アカンボウ・アカンボウノキ(羽)、バツパギンコ(狛)、ハシノキ(奥)、カギッチョノキ(府、八)、カギッコノキ(府)、カギッコ(府)、カタギ(奥)、カギンチョウ(青、立、羽、秋、瑞)、カギンチョ・カギンチョノキ(日)、ミズクサ(羽、八、日、檜、瑞、奥、菅)、ミズキ(檜)
ミツデカエデ	オガラベエタ(奥)
ミツバウツギ	ハシノキ(八)、カシクギ(檜)
ムクロジ	ムクレンジ(羽、青、檜、奥)、ムクレンズウ(羽、青、瑞)、ムクレンジユ(田)、ムクレンジ(立)、ムクレンズ(福)
メグスリノキ	カマネブ(奥)、カマネボ(菅)
モミ	モミソ(羽、青、秋、八、府、瑞、檜)
モミジ	ハナノキ(奥)
モミジイチゴ	キイチゴ(羽、青、瑞)
ヤシャブシ	アズマ(丹)、ヤシャ(奥、日)
ヤツデ	テンゴツパ・テンゴツパノキ(秋)

和名	方言名
ヤドリギ	ホヤ(奥、菅)
ヤマグルマ	モチノキ(奥、檜)
ヤマコウバシ	トロシバ(檜)
ヤマナラシ	ドロンボウ(奥)、ドロ・ドロノキ(奥)
ヤマハンノキ	ハンノキ(八、日、檜)
ヤマブキ	ツキノトウ(奥)、トウトウツキ(福、日)
ヤマブドウ	カマエビ(稻)、カガユビ(八)
ヤマボウシ	ヤマクワ(奥、日、檜、菅)
リョウブ	ビョウボウス(奥)、サルスベリ(奥、日、檜)、 ギョウブ(奥、菅)、リョウボ(日)、リョウボウ(奥)

—草—

和名	方言名
アレチノギク	ビンボウグサ(立)
イタドリ	イッタンドリ(羽、秋、青、冬、昭、府、八、立、国、 福)、イタンドリ(青、奥、檜)、スカンポ(府)、スツ カンポ(奥)
イヌタデ	アカマンマ(羽、立、府、野)、コンコンマ(瑞)
イヌビユ	ヒョウツパ(羽)、ヒョウナ(羽)、ヒョウ(丹)
イノコヅチ	ドロボウグサ(立)
イラクサ	エラクサ(府)、オロ(丹)
イワタバコ	イワナ(丹)、ユワナ(奥)
ウツボグサ	カゴソウ(羽、青)
ウワバミソウ	ミスナ(奥)

和名	方言名
エゾヒエ	エゾッペエ(奥、菅)
エノコログサ	ネコジャラシ(羽、府、青)
オオアレチノギク	ビンボウグサ(立)
オオバギボウシ	コレエ(八、丹)
オオバコ	オオバッコ(丹)、オンバク(羽、秋、八、多、立、奥、日)、オンバコ(羽、府、青、立、奥)、スモウトリグサ(府)
オオマツヨイグサ	ツキミソウ(羽、青、秋)
オキナグサ	ビンタボ(羽、秋、日、八)
オドリコソウ	ミツスイバナ(狛)
オノマンネングサ	ホウタルグサ(羽)、ホタルグサ(青)
オミナエシ	ボンバナ(丹)、オジュウゴヤバナ(八)
オヤマボクチ	ネエネンボウ(丹)、ネネンボウ(奥)、ウラジロ(奥)、ネンネンボウ(檜、奥、菅)、ネンネンパー(日)
カタバミ	ショツパグサ(八、立、府、奥)、トンボ(羽)、トンボグサ(八)、ミソツパ(羽)、スイツパ(青)
カヤツリグサ	マスグサ(羽、立、秋、八、府、瑞)、サンカクグサ(府)
カラスノエンドウ	スピービー(昭)、シビビー(羽、府)、スピビー(羽、秋)、ピーピーグサ(府)、ピーピーマメ(府、国)、ツルマメ(府)、マメノキ・マメグサ(府)
カラスビシャク	ツチクイ(羽)、ツチクイババア(羽)、ヘベソ(羽)、ツチツクイ(秋)、ドロツクイ(瑞)、ヘソベ(青)、ヘンベソ(秋、奥、日)、ヘンベソウ(八)、ヘボソ(稻)、ツチクイジジイ(立)、ドロクイバナ(府)
キケマン	ヘビクサ(奥、菅)

和名	方言名
ギシギシ	ウマギチ(羽)、ギシツパ(羽)、ギチツパ(羽)、ギチヨツパ(羽)、ダイオウ(府)、ギツチャ(秋)、ギツチヨツパ(立)、スイコウキ(八)
キツネノカミソリ	ワスレグサ(丹)、テツパレ(青)
キツネノボタン	コンペイトノキ(羽)、コンペイトウ(檜)
ギボウシ	ヤマオンバク(羽、青、八、瑞)、コウレエ(奥)、コオレツパ(菅)
クサノオウ	ドクグサ(奥)
クマザサ	クマンザサ(羽、秋)
ゲンノショウコ	リビョウグサ(羽、八、秋)、ジビョウソウ(丹)、イシャコロシ(福、羽、奥)、ジビョウグサ(檜)、イシャイラズ(立、府)、ビビョウグサ(日)
コウゾリナ	オトコタンポポ(羽)
コウヤボウキ	ハギ(八)
コニシキソウ	チチグサ(羽、青)
ジシバリ	ジガラミ(羽、立)、コゾウナカセ(羽)
シソ	チソ(丹、羽、多、青、奥)、キノ・キノツパ(羽、瑞、檜、立、国、青、奥)、キノ(多)
ジャガイモ	セエダ(八、檜、丹、菅)、ツルイモ(奥、檜)
ジャンヒゲ	カンタマゴ(羽)、カントンモモ(羽)、ジュウノタマ(檜、八)、ジュウノヒゲ(青)、リュウノタマ(稻)、ハタクサ(立)、ネコダマ(奥)
シュンラン	ジジイババア(羽、多、秋、青、瑞、奥、檜)、ジジババ(羽、日、多)、ホックリバアサン(稻)、ジジイババ(立)、ジジンバ(奥)、ジンジバンバ(多)、インダラ(奥)、ジンジイバッコ(八)



和名	方言名
スイバ	スカンポウ(立)、ツカンポポ(八)
スギナ	ジゴクツリ(羽)
スズメノテッポウ	ピーピーグサ(羽、福、立、青、府、秋、日、檜)、 ヨネグサ(府)
スズメノヤリ	シシイモ(羽)、シバイモ(羽)、セントイモ(日)
スベリヒユ	オテンキソウ(羽)、ヒデリグサ(立、府)、テリシラ ズ(府)、ヒヤクニチソウ(府)
セキシヨウ	メツパジキ(羽、昭、秋、立)
センブリ	トウヤク(羽、八、秋、青、奥、檜、丹)
タケニグサ	アサヤケ(八)、ササヤケ(奥)、スソヤケ(奥)、 ソソヤケ(奥)、ヨジームノキ(羽、立)
タニソバ	シシャア(奥)
タンポポ	タッポ(羽)、タンポ(羽、秋)
チガヤ	ツバナ(羽、福、府、多、昭、秋、立、狛)、ボウコ (府)、ツバクロ(昭)、チャガ(稻、調、府、国)、ミ ゴ(奥)、アマナ(羽)、アマネ(羽)、アマンボウ(羽)、 ツバネ(羽、青、秋、福、瑞、日)、ツバメ(羽、立、 青、秋)
チカラシバ	ミチシバ(羽、青、立、府)
チョウセンアサガオ	キチガイナス(羽、秋)
ツチアケビ	ツチアクビ(丹)
ツメクサ	コゾウナカセ(羽、八)、ホタルグサ(府、八、立、瑞)
ツユクサ	ハナガラ(羽)、ハンナガラ・ハンナンガラ(奥)
ツリガネニンジン	トトキ(羽、青、檜、丹)
ツリフネソウ	コマノヒザ(奥)

和名	方言名
ツルボ	オシヨウロ(羽)
ツルマンネングサ	イシノボリ(羽)
トキンソウ	ベツタラグサ(府)、コゾウナカセ(羽)
ドクダミ	ジュウヤク(羽、府、秋、青、立、国、保、瑞、奥)、 ジュウワク(八、多)、イシャゴロシ(奥)
ナズナ	ペンペングサ(全般)、シャミセングサ(府、奥)、 シンデエカギリ(八)
ナンテンハギ	アズキツパ(羽)、アズキナ(羽)
ニワゼキショウ	ナンキンアヤメ(羽、瑞)
ネジバナ	ネジツパナ(羽)、ネジレツパナ(羽、青)、 ネジリツパナ(立)
ノカンゾウ (ヤブカンゾウ)	オダイリサマ(羽、立、青)、オダイリソウ(羽)、オ ダイリグサ(秋)、カジバナ(瑞)、カンソ(府、瑞、多)、 オカンソ(府)、ヘビショウブ(檜)
ノキシノブ	ソロバングサ(青)
ノコンギク	ジュウサンヤバナ(奥)
ノビル	ヒル(青、丹、奥)、ノビロ(羽、立、秋、狛、檜、入)
ハコベ	ヒヨコグサ(立)、ヒヨウナグサ(立、八)
ハシリドコロ	ロート(丹)、ユキワリソウ(日、丹、奥、菅)、 キチゲエグサ(奥、日)、トコロ(奥)
ハルジオン	ビンボウグサ(府)、シンデエカギリ(日)
ヒエ	ヘエ(羽、秋、立)
ヒガンバナ	テクサレ(羽)、テツパレ(羽、青)、テツパナ(羽)、 ヘビバナ(奥)、シブツツパナ(府)、ヘビマクラ(奥)、 ミミダレグサ(立)、ハコボレ(羽、福、立、国、八、 日)、チチッカブ(奥)

和 名	方 言 名
ヒメカンスゲ	フデ(青、羽)
ヒメジョオン	ビンボウグサ(府)
ヒメムカシヨモギ	シンダイカギリ(羽、秋、立)、ビンボウグサ(羽、秋、青、瑞、檜)
ヒレアザミ	ボケアザミ(奥)
ヒルガオ	チョコバナ(府、多、八、小、瑞、多)、アメフリアサガオ(八、青、羽、立)、ガジンボウ(羽)、ガズンボウ(瑞)、アメフリバナ(瑞、立、国)、オテンキソウ(青)
フキノトウ	フクノタマ(八)
フシグロセンノウ	ユウダチバナ(奥)、オゼンバナ(奥)、ボンバナ(奥)
フユノハナワラビ	カンワラビ(羽、瑞)
ヘクソカズラ	ヘットウズラ(羽)、ヘットズラ(羽、秋)、ヘットカズラ(瑞)、ヘックサリ(日)、ヘックサレ(日)、ヘクサズル(檜)、ヘックサズル(奥)、オキユウバナ(羽)、ヘットウカズラ(立)、ヤイトバナ(府)
ハウセンカ	コウセンコ(羽、立、入)、コウセンカ(青、檜)
ホタルブクロ	トツカンバナ(羽、福、昭、八、秋、青、狛、瑞、檜、立、国、日、奥)、チョウチンバナ(羽、瑞、立、多)、アンポンタン(多)、タッタッポウ(菅)、ポツカンバナ(奥)
ホトケノザ	ブルブルソウ(奥)
マツバポタン	オテンキソウ(青、羽、檜、立、多、八)
ミズヒキ	オコワ(羽)
ミノソバ	コンペイトウ(羽、秋)、コンペイトウノキ(立)、オコメ(青)

和 名	方 言 名
ミソハギ	ボンバナ(羽、立)、オボンバナ(八)
ミドリハコベ	タイショウハコベ(奥)
ミヤマハンショウズル	ナベコロゲ(奥)
ミヨウガ	バカ(羽、立)
ムギワラ	ムイカラ(青、羽、秋、福、瑞、奥、日、国)、 ムイガラ(八)
メヒシバ	ハグサ(羽、立、秋、府、檜)
ヤエムグラ	クンショウグサ(府、福)、イトムグラ(奥)
ヤブガラシ	ヤブツカラシ(青、羽)
ヤブラン	オミキ(立)
ヤマゴボウ	カラッコ(奥)
ヤマノイモ	ヤマイモ(青、羽)、ヤメエモ(羽、秋)、テンゴウサ マ(羽)、トロイモ(立、羽、秋)、テングノハナ(立)、 ベンベンゴ(羽、立)、トロロイモ(羽)、ドンベラッ コ(瑞)
ヤマユリ	ヨコ(奥)
ヨメナ	ヨメナワ(丹)、ジユウゴヤバナ(奥)
ヨモギ	モチグサ(羽、秋、青、府、瑞、檜、奥、立、狛、多、 国、丹)、モグサ(羽)、クサノハナ(羽、秋、青、福、 八、稻、立、多、国、檜、奥、丹)
レンゲソウ	ゲンゲ・ゲンゲソウ(羽)
ワレモコウ	ボウズツパナ(羽、立)、ダンゴツパナ(瑞)、ボウズ グサ(立)、ボウズ(八)

—虫—

和 名	方 言 名
アオバハゴロモ	ハトムシ(立)
アシナガバチ	アシツツルシ(立、福、八、青、羽、野、多、日、奥、菅)
アブラゼミ	オオゼミ(立、八)、アカゼミ(羽、福、日、檜)、 アカザ(青、奥)
アメンボウ	カニチ(立)、ミズスマシ(八)、トンビ(八)
アリ	アリンド(立、羽、青)、アリンコ(青、檜)、 アリンゾウ(檜)
ウスタビガの繭	ヤマガマス(日)、カラジッコ(菅)
ウスバカゲロウ	バケトンボ(八)、ヨウトンボ(奥)
ウスバカゲロウの 幼虫	テエチッコ(八)、イチッコ(八、野)、ヒッチヤリム シ(八)、シリバサミ(奥)、カッコウ(奥)、カッコウ サマ(奥)、テックボ・テクボ(奥、菅)、アトビツシ ヤリ(檜)、ウシッコ(羽、福、秋、八、日、檜)、マ マッコ(檜)、オシッコ・アトヒツサレ(青)
ウスバキトンボ	シオカラ(菅)
ウマオイ	スイッチョ(八、羽、青、金、奥)
オオスズメバチ	オオフエンドウ(菅)、オオクマン(青)
オカダンゴムシ	マンジュウムシ(立)、ダンゴムシ(羽)
オニヤンマ	オオヤマトンボ(羽、福、日、青、奥)、オオヤマト ンブ(野)、オオトラトンボ(菅)、ミズツキ(菅)
カブトムシ	テンゴウムシ(羽)、クルマヒキ(秋)、セエカチ(八、 福、日)、ゴロタ(青)
カブトムシの幼虫	サズカリ(秋、立、羽、福、日)、ノケタ(菅)、マン ジュウムシ(八)、ショウユダル(羽、瑞)、マゴタロウ (金)

和名	方言名
カマキリ	トカゲ(八、羽、福、立、青、日、奥、檜、菅)、カマイタチ(八)、オオガンボウ(奥)、ハエトリ(奥)、オタツバカバカ(青)、バカバカ(秋)
カマキリの卵	カラスノツバキ(八、羽、奥)、カラスノシズク(奥)
カミキリムシ	キーキームシ(八)
カメムシ	コブタ(八、福)、コブタムシ(日、奥)、クサムシ(秋、奥、菅)、ヘツピリムシ(立、日、奥、青)、ヘツクサボウズ(奥)
カラスアゲハ	カマクラチョウチヨ(羽、福、八、日、奥、菅、青)、カマクラ(羽、青)
カワゲラ	イカダ(八)
キリギリス	ギツチヨ(立、羽)、キイツチヨ(八)、ギイツチヨ(多)
ギンヤンマ	カアトンボ(奥)
クツワムシ	ガチャガチャ(羽、立、青、野、金、奥)
クマバチ	アマサケバチ(奥)、ダンゴバチ(野)
クロスズメバチ	ヘボ(菅)
クワガタムシ	サイカチ(羽)、ガジワラ(奥、菅)、ハサミムシ(青)
コオロギ	キノゾウ(立、奥)、キノユウド(八)、ケサノカカア(八)、オケサババア(檜)、カタサセスソセ(日)、オケサ(奥)
コガネムシ	エゾウ(立、奥)、カナブンブン(立)、エゾ(八)
ゴキブリ	コウジンムシ・コウジンサマ(八)、アブラムシ(八)、カメチヨロ(日)
コメツキムシ	オタケ・オタケサン(狛)
※シオカラトンボ	♂バアトンボ(奥)、♀ジイトンボ(ムギワラトンボ)

和名	方言名
ジグモ	カンペイハラキリ(檜)、カンペ(立)、カンベ(八)、フクログモ(菅)、ハラキリグモ(狛、立)、サムライ(青)、サムライグモ(狛、立)、ハラアキレキンザブロウ(日)、キンザブロウ(福)
ジバチ	カガナキ(八)、アナバチ(八)
シャクガの幼虫	ビヤムシ(八)
ショウリョウバッタ	ハタオリバッタ(立)
スズメガの幼虫	ニシハドツチ(羽)、ニシャアドツチ(日、福)、ニシドツチ(狛)
スズメバチ	フエンドウ(奥、羽)、オオクマン(八)、オオクマンバチ(立)、クマンバチ(野、日、福)、チュウクマン(青)
セミの幼虫	セミノコマ(羽)、セミウマ(八)
ツクツクボウシ	オオシンツク(八、羽、福、立、野、青、日、奥、檜、菅)、ホシツク(立)、ツクツクムシ(奥)
ニイニイゼミ	チッチー(羽)、ジージーゼミ(青、立)、チーチーゼミ(八、福、日)、ジージー(奥)、シーシーゼミ(奥)
ニジュウヤホシテントウ	オカタムシ(菅)
ニワハンミョウ	ニワムシ(狛)
ノコギリクワガタ	ツノマガリ(八)
ハグロトンボ	オハグロトンボ・オハグロ(羽、八)、カワトンボ(八)
ハリガネムシ	アシガラミ(八、日)、アシガラミ(檜)、ユビカラミ(菅)、テマカリ(菅)、モテエムシ(菅)
ヒグラシ	カナカナ(立、羽)、ケツケ(羽、秋、奥)、ケツケツ(羽、福、青、奥)、ケテケテ(奥)、ツケツケ(奥、檜)
ヒゲナガカワトビケラ	マゴタロ・マゴタロウムシ(羽、福、日)、クロカアムシ(羽)、クロカワ(羽)

和名	方言名
ヒラタクワガタ	ヒラバン(菅)
ブユ	ブヨ(羽、日)
マダラカマドウマ (クラズミウマ)	オカマビッチョ(青、羽)、カマギッチョ(奥)、 カガビッチョ(奥)、イゴ(菅)、ウマ(青、羽)、 イッケントビ(福)
マツムシ	チンチロリン(羽、金、八、立)
ミイデラゴミムシ	ヘツピリムシ(多)
ミズスマシ	フウセンムシ(八)
ミヤマアカネ	クルマトンボ(奥)
ムカデ	ムカゼ(立、福、日、檜)、ハガチ(八、野)
ムギワラトンボ	ジイトンボ(奥) (シオカラトンボの雌)
ヤママユガ	ヤマンマイ(羽、府)、ヤマンメエ(福、日、菅)
ワタムシ	シロッコ(羽、福、秋、日、檜)、シラッコ(八)、 ユキンバ(菅)、シランバ(八)、ユキムシ(八)

※雌雄が入れ替わっている。

一鳥一

和名	方言名
アオジ	アオバカ(八)
アオバズク	ホー(羽)、ホッコ(日)、ホズッコ(菅)、ホーホード リ(菅)
アオゲラ・アカゲラ	ケラ(奥)
アカショウビン	メンドロロ(檜)、ピンドロロウ(菅)、ヒイヒヨン (奥)、ミズコイドリ(八)、ピンドロロ(奥)
イカル	ミノカサホシイ(羽、福、日)、マメグチ(八)、マメ マワシ(菅)、モンツキダカ(菅)



和 名	方 言 名
ウグイス	バカッチョ(羽)、チャッチャツ(立)、ホケチョウ(奥)、ホウホケキョ(福、日)、ミノチョ(青)
オオヨシキリ	カケシ(保)
カワセミ	カワガラス(八)、ショウビン(八、野)
キジバト	ヤマバト(羽)、ドバト(福、日)
キセキレイ	チチン(菅、奥、五)、セキリ(八)、チンチンカラカラ(日)
クマタカ	ボロツタカ・ホンダカ(奥)
コゲラ	マメゲラ(菅)
コジュケイ	コジツケ(羽、青、立、福、日、保)、チョットコイ(羽、福、日)、チョウセンキジ(立)、ヤマキジ(保)
コノハズク	カッキントン(奥、菅)、カッキントウ(菅)、ゴキトウドリ(檜、青)、エボ(青)
サシバ	ピッピーダカ(菅)、ヘンビー(菅)
サンコウチョウ	サンコウジジイ(八)、サンコチチ(保)
ジョウビタキ	ヒッカタ(羽)、モンツキ(羽、秋)、ダンゴッチョ(八、五)、ダンゴショイ(奥、菅)、ダンゴセイ(奥)、バカッチョウ(奥)、バカッチョ(秋、羽)、ヒッコタン(青)
チョウゲンボウ	ツルサリ(奥)
ツグミ	チョウマン(羽、立、奥、菅)
ツツドリ	ジゴクドリ(菅)
トラツグミ	ヒョウシン(奥)、ヒョーヒョードリ(菅)
ノスリ	マグソダカ(八)
ハイタカ	ヒョットウダカ(菅)
ハヤブサ	ホンタカ・ヘンビー(奥)

和名	方言名
フクロウ	ホッコ(秋、檜)、ホウツク(立)、オークポ(青)
ホオジロ	セツトウ(奥、丹)、ヒョツトウ(奥、菅)、 テッペンイチロクニシマケタ(福、日)
ホトトギス	ホウチョツキツチヨ(菅)、テッペンカケカタ(立)、 オトノドツツキレ(福)
ミソサザイ	ミソツチヨ(羽、八、多、奥、日、五、菅)、ミソツ カチ(青)
ミミズク	ミズク(奥)、ズク(八)、ホッコ(八)
ヤマセミ	シラサギ・カワゲラ・ヘラベタ(奥)

—魚—

和名	方言名
アブラハヤ	アブラツパヤ(羽、福、日)、ニガツパヤ(八、菅)
イワナ	ユワナ(奥)
ウグイ	ハヤ・ホンバヤ(羽、福、日)、ハヤメド(奥)、クキ バヤ(婚姻色：羽、福)、アカツパヤ(婚姻色：菅)、 アカンバヤ(青)、モロコ(白色：菅)、クキツパヤ(秋)
オイカワ	バカツパヤ(羽、福、日、秋)、オコゼツパヤ(秋)
カジカ	カジッカ(羽、八、福、日)、カジー(八)、 オオマラカジー(10センチ以上のもの：菅)
カジカの卵	アアコウ(羽、福、日)
カマツカ	コトウ・オコト・コトウツパヤ(秋)
ギバチ	ギンタ(羽)、ゲバチ(多)、ギギ(多)
ホトケドジョウ	オババ・オババドジョウ(羽、秋)、オダブ(日)、 ババス(秋)

—その他—

和 名	方 言 名
アナグマ	マミ(奥)、ササグマ(奥)
カタツムリ	メアマアズ(檜)、マイマイズウ(青)、マイマイズ(立)、デンデンムシ(羽、日、奥)、メエメエズ(日)、メエモウズ(福)
サンショウウオ	ヤマカジ(八)、ヤマツカジカ(檜)、ヤマカジカ(奥)、ヤマツカジー(日、菅)、サンショツカジカ(奥)
テン	テンマル(奥)
トカゲ	カガミツチヨ(羽、福、八、立、野、多、秋、青、日、奥、菅、檜)、カガビツチヨ(奥、菅)、カマギツチヨ(奥)
ナメクジ	デエロ(奥)
ヒキガエル	オオヒキゲエロ(奥、日)、ゴトウベエ(八)、ゴトンベエ(菅)、イボゲエロ(奥)、オオヒキ(多)、オヒキ(青)
ヒル	ヒールンボ(狛)、ヒール(奥)
ムササビ	オオバンドリ(奥)、バンドリ(奥、菅)、オバン(菅)、ザブトン(日)
モモンガ	コバンドリ(奥、菅)、コバン(菅)、モモンジー(菅)
モリアオガエル	アオガエル(奥)
リス	キネズミ(福、日)

研究協力者（敬称略）

石田良実（羽村郷土研究会）

吉野万里子、山田半三郎、島田勝美（はむら自然友の会）

お世話になった方々（敬称略）

木村寿郎、小沢一彦、下田茂一、中島勝衛、原島昭和、本沢陽一郎、  
小林久夫、坂本忠、石塚幸右衛門、奥秋明治、保科重永、守屋忠之、  
山崎義男、山崎ヨシ江、落合功、藤本辰也、神藤達男、加藤源久、  
清水善明、中島恵子、亀谷行雄、武士田忠、尾島俊夫、松島満。

## 参考文献

はむらの植物ガイド(羽村町教育委員会) 府中市史(府中市)  
日野市史(日野市) 稲城市史(稲城市) 多摩町史(多摩町)  
府中市自然調査報告書(府中市教育委員会) 府中市の口伝え  
集(府中市教育委員会) 調布市史(調布市) 小金井市誌(小  
金井市) 狛江市史(狛江市) 福生市の民俗(福生市教育委員  
会) 狛江・語りつぐむかし(狛江市) 青梅市の民俗(青梅市  
教育委員会) 立川の年中行事(立川市教育委員会) 立川の  
わらべ遊び・わらべ唄(立川市教育委員会) 多摩の年中行事(町  
田市立博物館) 奥多摩町誌(奥多摩町) 奥多摩町の民俗(奥  
多摩町教育委員会) 檜原村史(檜原村) 稲城市の民俗(稲城  
市教育委員会) 下保谷の民俗(保谷市) 国立の生活誌(国立  
市教育委員会) 福生市史資料編(福生市) 立川の方言(立川  
市教育委員会) 私の民俗誌(福生市教育委員会) 日の出町  
史(日の出町) 日の出町の年中行事(日の出町教育委員会)  
丹波山村誌(丹波山村) 秋川の自然(秋川市) 鳥はともだち  
(五日市町郷土館) 東京の民俗(東京都) 定本市史 青梅(青  
梅市) 八王子市史(八王子市) 暮らしの中の植物(みくに書  
房) 多摩の野鳥と野草(武蔵野郷土史刊行会) 八王子方言  
考(かたくら書店) ふる里民俗誌(かたくら書店) ふるさと  
東京 民俗歳時記(朝文社) 多摩の方言と生活(教育報道社)  
くらしぶり図絵(多摩書店) 秋川市の年中行事(秋多中PTA)

## あとがき

今回の調査で動物や植物名の方言収集に終点のないことを知った。なぜなら、現地に赴き、年輩者から草木や虫の方言を思い出していただくには、実物や写真、あるいは、長い会話の中で、ひょっこり飛び出してきたりするので、長期戦を覚悟で取り組まなければならないからだ。

奥多摩から山梨県にかけては、方言も民俗行事も豊富で何度も通った。ところが、都心に近くなるにしたがって方言や民俗行事を知る人がなく、やむを得ず文献に頼ることになった。

公共機関が発行した市町村史誌をはじめ、各種の文献は、動植物の名前に不確かなものがあり、さらに調査しなければならないものもかなり見受けられた。

方言情報の収集にあたっては、多摩の動植物方言調査資料集『とっかんばな咲いた』を作成し、配布したところ、動植物に関心のある方々からの反響があり、広い範囲から各種の情報が集約でき、効果があった。

終点のない調査とはいえ、より目標に近づくためにも、これからも継続して調査を続けて行く所存である。

1992年 9月

はむら自然友の会  
岡 崎 学

# とっかんばな咲いた

—多摩の動植物方言調査資料—



とうきゅう環境浄化財団助成研究

## はじめに

東京の母なる川、多摩川。川が何万年にもわたって育んできた大自然の中に数多くの動植物が生きついています。

広く見れば、東京西部に住む多摩の人々も多摩川が作り出した自然の中に生活していることになるのです。

多摩川流域に住む人々の生活は、川に魚を求め、山に炭焼きに入り、田畑に鍬をふるった時代を遠い過去のものとし、今や、住環境に大きな変革をもたらした新しい時代を迎えています。

このため、野山や川に代表される自然と人間との関係は、日常生活の上では、希薄なものとなってしまいました。

このたびの調査では、方言として今も人々の記憶にあるものの中に、自然と人間とのかかわりの深さを数多く発見することができ、一応の成果を上げることができました。

この小冊子は、忘れられつつある動植物方言について、より広くの方々から、情報を提供していただくことを期待して作成したものです。

今後は、みなさまから寄せられた情報を追加してこの調査を補完し、価値あるものにしていきたいと考えています。

1992年6月



# 目 次

動植物方言ノート	2
動植物方言調査にご協力を	37
多摩の動植物方言一覧	38
研究協力者	58
参考文献	59
あとがき	60

## 例 言

1. この小冊子は、とうきゅう多摩川環境浄化財団の助成をうけて、2年間にわたって調査した結果をまとめたものです。
2. 調査にあたっては、はむら自然友の会及び羽村郷土研究会々員の協力を得ました。
3. 執筆及び写真は、岡崎学が担当しました。
4. 野鳥の写真は、杉並区立郷土博物館から、魚のホトケドジョウの写真は、羽村市立郷土博物館から借用しました。
5. 動植物方言一覧表の括弧内の略字は、各市町村名の頭文字で、ただし、日野市は(野)、日の出町は(日)、小金井市は(金)、小菅村は(菅)と表記してあります。

## 動植物方言ノート

多摩語とも言うべき多摩独特の言葉一方言一があります。今やお年寄りの間や、地元住民同士の会話の中でときどき耳にする程度になりました。若い人たちの間で面白半分に使われる方言を除けば、日常会話からは、やがて消えて行くことでしょう。

動植物の名前は、野山に遊んだ子供たちか、動植物を相手に生業としていた人たちが名付けた場合が多かったのですが、子供をとりまく環境や、職業の変化、さらには、現代の情報化社会が動植物方言を不必要なものとしてしまいました。

今の子供たちは、カブトムシをデパートで買う時代で、自然の中で遊ぶことがほとんどなくなってしまいました。そのため、彼らが虫や鳥に名前をつける機会を失ってしまったのです。

大人の場合でも、畑仕事をする人が堆肥の中からカブトムシの幼虫をつまみ出すこともなく、鍬で土を掘り起こすことも耕運機に任せるようになり、土の中に眠っている蝶や蛾の蛹を見かける機会もほとんどなくなってしまいました。

今回の調査では、青梅以西に樹木と鳥に関する方言が多く、羽村～八王子～立川あたりでは、草や虫の方言を多く聞き取ることができました。また、都心に近くなるにしたがって自然とのかかわりが希薄になり、樹木や、草の方言が失せていることも判りました。

それでは、動植物方言情報収集の手掛かりとして、今まで調査した方言の中から木、草、虫、鳥、魚など34種について、市町村別に紹介しておきます。



## アセビ

《ツツジ科》

## 方言

アセボ (羽村市、立川市、瑞穂町、日の出町)

アシビ (羽村市、日の出町)

ブスゴウ (羽村市、日の出町、奥多摩町)

ウジコロシ (羽村市、日の出町) ダニシバ (檜原村)

ハコボレ (青梅市) アサメシバ (小菅村)

アゼミシバ・ウジコロシ・ネズミシバ (羽村市)

呼び名が多く、ネズミシバは、サツマイモの貯蔵穴の回りに挿してネズミ除けに、ダニシバは、馬につくダニ退治に使いました。戦後、青梅市の小学校では、子供のシラミ退治に煎じて使ったそうです。



イヌツゲ

《モチノキ科》

方言

- |         |                                 |        |        |
|---------|---------------------------------|--------|--------|
| ダンゴノキ   | (羽村市、青梅市、府中市、立川市、日野市、日の出町、奥多摩町) |        |        |
| ダンゴサシノキ | (秋川市)                           | ダンゴサシ  | (府中市)  |
| ダンゴバラ   | (檜原村)                           | マエダマノキ | (府中市)  |
| マイダマギ   | (青梅市)                           | ヘダマ    | (奥多摩町) |

ほぼ多摩全域で小正月に繭玉を挿した木は、イヌツゲです。ウメ、コナラ、カシなどのほか、多摩川に近いところでは、ヤナギを利用しています。



## エゴノキ

《エゴノキ科》

### 方 言

- エゴ (羽村市、府中市、国立市、日の出町)
- ヨゴノキ (羽村市、立川市、秋川市、福生市、日の出町)
- セツケンノキ (羽村市、秋川市)
- シャボンノキ (青梅市、秋川市)
- シャボングサ (檜原村)

有毒植物ですが、子供たちは、この実をつぶして泡をたてて石鹸遊びをしました。奥多摩町や、檜原村では、ウツギをシャボンダマノキと呼んでいます。

初夏、玉川上水の散策路は、エゴノキの花道が続き人々の目を楽しませてくれます。



タラノキ

《ウコギ科》

方言

タラッポイ (日の出町、奥多摩町、丹波山村)

タランポイ (日の出町、檜原村)      タランポ (日の出町)

タラッポエ (日の出町)      タラッポ (日の出町)

タラッポウ (小菅村)      タランポ (福生市)

タラノメ (羽村市、青梅市)

山菜の王者と呼ばれるくらいですから、年に一度は食べたいものです。この味は、山に住む人々にとっては、魚の鱧に匹敵したのでしょうか。鱧とタラノキには、共通点がありそうです。

よく似たハリギリを奥多摩方面では、ポウダラとか、アクダラといって下等に見ています。



## ウワミスザクラ

《バラ科》

### 方言

ヘッピーザクラ (羽村市)

シヨンベンザクラ (奥多摩町)

方言では、ウワミスザクラとイヌザクラを区別していないようです。

生木を燃やすと水分が出てピーピー、パチパチと音をたてるので、このような名前になったということです。

ウワミスザクラとイヌザクラを比べると、花も実も、ウワミスザクラのほうがワンランク上です。なぜか、イヌの名がつくものには、「舌」の意味が込められているようです。



クサボケ

《バラ科》

方 言

シドメ (羽村市、八王子市、多摩市、府中市、青梅市、秋川市、瑞穂町、檜原村)

シドミ (府中市、狛江市)

チドメ (奥多摩町)

木や花よりも果実をシドメとカシドミという場合が多いようです。草むらに咲く朱色のクサボケの花は、印象的ですが、果実は、そのままでは、渋くて食べられません。シドメのシには、渋の意味があるようです。





ニフトコ

《スイカズラ科》

方 言

- アボヘボノキ (府中市、小金井市)
- カツンボ (清瀬市、国立市)
- ニフツク (奥多摩町)

小正月行事に用いるアボヘボ(粟穂稗穂)の材料は、府中市や、小金井市などの平野部ではニフトコを用い、奥多摩の山地ではヌルデが一般的です。

カツンボは、ヌルデのことですが、清瀬市、国立市ではニフトコ、調布市ではミズキです。

春、白い花が咲き、夏、赤い実がなります。



ミズキ

《ミズキ科》

方 言

- |         |                       |         |        |
|---------|-----------------------|---------|--------|
| カギンチョウ  | (羽村市、青梅市、秋川市、立川市、瑞穂町) |         |        |
| ミズクサ    | (羽村市、瑞穂町、奥多摩町、小菅村、他)  |         |        |
| カギッチョノキ | (府中市、八王子市)            |         |        |
| カギッチョ   | (府中市、狛江市)             | ハシノキ    | (奥多摩町) |
| カツンボ    | (調布市)                 | ニフトコ    | (調布市)  |
| カギッチョ   | (日の出町)                | カギッコ    | (府中市)  |
| カギンチョノキ | (日の出町)                | カギッコノキ  | (府中市)  |
| キンカンボウ  | (府中市)                 | バツパギンコ  | (狛江市)  |
| ミズギ     | (檜原村)                 | アカンボウ   | (羽村市)  |
| カタギ     | (奥多摩町)                | アカンボウノキ | (羽村市)  |

子供たちの冬場の遊びで、ミズキの冬芽をひっかけあって遊んだとのこと。



## リョウブ

《リョウブ科》

### 方言

- サルスベリ (奥多摩町、日の出町、檜原村)
- ギョウブ (奥多摩町、小菅村)
- リョウボ (日の出町)
- リョウボウ (奥多摩町)
- ビョウボウス (奥多摩町)

奥多摩町や小菅村では、ナツツバキをサルスベリという所もあります。両者とも木肌が滑らかなので、サルスベリ（百日紅）との共通点があります。

木肌にまだら模様があり、春の芽出しが美しく、茶席などに似合います。漢字で「令法」と書きます。



## ホタルブクロ

《キキョウ科》

### 方言

- トツカンバナ (羽村市、昭島市、八王子市、立川市、青梅市、秋川市、狛江市、瑞穂町、奥多摩町、日の出町、檜原村)
- チョウチンバナ (羽村市、立川市、多摩市、瑞穂町)
- ポツカンバナ (奥多摩町)    アンポンタン (多摩市)
- タッタッポウ (小菅村)

ほとんど多摩全域で、トツカンバナと呼ばれています。身近な動植物には、子供たちがつけた名前がたくさんあります。トツカンバナは、その代表的なもので、ローカル色を感じます。



イタドリ

《タデ科》

方 言

イッタンドリ (羽村市、福生市、秋川市、青梅市、昭島市、  
立川市、府中市、多摩市、八王子市)

イタンドリ (青梅市、奥多摩町、檜原村)

スカンポ (府中市) スツカンポ (奥多摩町)

早春、幹の柔らかいところをポキンと折り、皮をむいて食べます。野原で遊ぶ子供たちにとって、格好の水分補給植物だったようです。

語源は、痛み取りです。檜原村のイタンドリが痛み取りに近い言葉です。



チガヤ

《イネ科》

方 言

ツバナ	(羽村市、府中市、多摩市、昭島市、秋川市、立川市、狛江市)		
ツバネ	(羽村市、青梅市、秋川市、福生市、瑞穂町)		
チャガ	(稲城市、調布市、府中市)		
ボウコ	(府中市)	ツバクロ	(昭島市)
ミゴ	(奥多摩町)	アマナ	(羽村市)
アマンボウ	(羽村市)	アマネ	(羽村市)

ほとんどの場合が白い若穂か、根を食べることから名付けられています。チャガは、盆行事に使用される場合の呼び名です。



## ノカンゾウ

《ユリ科》

### 方言

オダイリサマ (羽村市、青梅市、立川市)

オダイリソウ (羽村市)      オダイリグサ (秋川市)

カジバナ (瑞穂町)      ヘビシヨウブ (檜原村)

オカンソ (府中市)      カンソ(府中市、多摩市、瑞穂町)

3月、ひなまつりの頃、萌芽期のノカンゾウや、ヤブカンゾウは、葉の重なり方がひな人形の襟元のように見えます。

カジバナは、八重咲きのヤブカンゾウを火事の火に見立てたものでしょう。

早春の葉は、食用になりますが、多摩の方言に山菜としての名前はありません。



## ツメクサ

《ナデシコ科》

### 方 言

コゾウナカセ（羽村市、八王子市）

ホタルグサ（府中市、八王子市、立川市、瑞穂町）

杉の葉のようなツメクサは、どこにでも生える強い草で、お寺の小僧さんが、取っても取っても取りきれないので、泣きがはいるという意味で、「小僧泣かせ」だそうです。

多摩地域では、オノマンネングサをホタルグサと呼んでいるので、ツメクサとの混同があるようです。

コゾウナカセは、繁殖力の強い植物につけられる名前で、羽村市内では、地域によって、ジシバリ、トキンソウ、ツメクサの3種類にコゾウナカセの名がついています。





カラスノエンドウ

《マメ科》

方言

- |        |           |      |       |
|--------|-----------|------|-------|
| シビビー   | (羽村市、府中市) |      |       |
| スピビー   | (羽村市、秋川市) |      |       |
| スピービー  | (昭島市)     |      |       |
| ピーピーグサ | (府中市)     |      |       |
| ピーピーマメ | (府中市)     | ツルマメ | (府中市) |
| マメノキ   | (府中市)     | マメグサ | (府中市) |

サヤを裂いて豆を取り出し、草笛にします。「スースースピビービ」と吹くので、スピビーとか、シビビーと呼ばれます。

最近の図鑑には、ヤハズノエンドウとありますが、やはり、カラスとか、スズメの名に親しみを感じます。



## ハシリドコロ

《ナス科》

### 方言

ユキワリソウ (日の出町、奥多摩町、丹波山村、小菅村)

キチゲエグサ (日の出町、丹波山村)

トコロ (奥多摩町)

ロート (丹波山村)

早春の山で目にとまる有毒植物で、誤って食べるともだえ苦しみ、走り回るので、キチゲエグサの名があります。

戦後、製薬会社が地元民に呼びかけて大量に採らせたので、ロートの名が残っています。毒と薬は、表裏一体なのです。



## ヒガンバナ

《ヒガンバナ科》

### 方言

- ハコボレ (羽村市、立川市、日の出町)
- テツパレ (羽村市、青梅市)
- テツパナ・テクサレ (羽村市)
- シブトツパナ (府中市)
- ミミダレグサ (立川市)
- へびバナ・へびマクラ・チチッカブ (奥多摩町)

青梅市では、キツネノカミソリをテツパレ、アセビをハコボレと呼ぶ地域があります。

いずれにしても、有毒植物らしい名前がつけられています。



ヒルガオ・コヒルガオ

《ヒルガオ科》

方言

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| チョコバナ    | (府中市、多摩市、小金井市、瑞穂町) |
| アメフリアサガオ | (羽村市、八王子市、青梅市、立川市) |
| アメフリバナ   | (立川市、瑞穂町)          |
| オテンキソウ   | (青梅市)              |
| ガジンボウ    | (羽村市)              |
| ガズンボウ    | (瑞穂町)              |

方言では、ヒルガオとコヒルガオを区別していないようです。

6月の梅雨の時期から咲きはじめるので、方言にも雨とか天気という言葉が入っています。子供たちは、この花を取ると雨が降ると信じていたそうです。

ガジ(ズ)ンボウの語源は、意味不明です。



ウスバカゲロウの幼虫

《ウスバカゲロウ科》

方 言

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| ウシッコ     | (羽村市、秋川市、八王子市、檜原村) |
| テクボ・テックボ | (奥多摩町、小菅村)         |
| イチッコ     | (八王子市、日野市)         |
| テエチッコ    | (八王子市)             |
| アトビツシヤリ  | (檜原村)              |
| カッコウ     | (奥多摩町)             |
| ヒツチャリムシ  | (八王子市)             |
| ママッコ     | (檜原村)              |
| カッコウサマ   | (奥多摩町)             |

神社などの縁の下にある摺鉢状の小さな窪みがウスバカゲロウの幼虫「アリジゴク」の住み処です。ウシッコは、牛つ子の意味で、すがた形から名付けられたものでしょう。



ウスタビガの繭

《ヤママユガ科》

方言

ヤマガマス (日の出町)

カラジッコ (小菅村)

叭 (かます) は、塩や石炭などを入れた藁製の袋で、ウスタビガの繭と口の部分が似ているので、このような名前がつけられたものです。

カラジッコは、木枯らしに揺れている黄緑色をした空っぽの繭のことでしょう。



## カマキリの卵

《カマキリ科》

### 方 言

カラスノツバキ（羽村市、八王子市、奥多摩町）

カラスノシズク（奥多摩町）

カマキリの卵は、カラスのつばきとか、カラスのしずくなどと呼ばれていますが、この卵とカラスを結び付けたのは、誰なのでしょう。やはり、野原を遊び場に使っていた子供たち以外に考えられません。

多摩地域では、カマキリをトカゲと呼ぶところが多く、トカゲをカガミツチヨといいます。また、カマキリの腹の中に寄生しているハリガネムシには、モテエムシ（元結虫）とか、テマカリ（手間借り）などと面白い名前がついています。



カブトムシの幼虫

《コガネムシ科》

方言

- |         |               |        |        |
|---------|---------------|--------|--------|
| サズカリ    | (羽村市、秋川市、立川市) |        |        |
| ダンゴムシ   | (立川市、小金井市)    |        |        |
| ショウユダル  | (羽村市、瑞穂町)     |        |        |
| マンジュウムシ | (立川市)         | マンジウムシ | (八王子市) |
| マゴタロウ   | (小金井市)        | ノケタ    | (小菅村)  |

成虫は、テンゴウムシ。(天狗虫)というので、サズカリは、天狗の授かり物という意味かもしれません。

マンジュウムシ、ショウユダルなどと呼ばれ、麦藁や落ち葉を利用して堆肥を作っていた時代には、堆肥の積み替え時にごろごろと出てきて、まとめて捨てられていたそうです。

小菅村で、カブトムシの幼虫のように動きの鈍い人をノケタと言ったりしたということです。





## ジグモ

《ジグモ科》

### 方言

サムライグモ (狛江市、立川市)

ハラキリグモ (狛江市、立川市)

カンペイハラキリ (檜原村) フクログモ (小菅村)

ハラアキレキンザブロウ(日の出町) キンザブロウ(福生市)

木の根元などに細長い袋状の巣を作って住んでいます。子供たちは、クモを捕らえてクモ同士を格闘させたりしますが、飽きてくると鋭い上顎でジグモ自身の腹部を切るように仕向けたりして遊びます。



クラズミウマ

《カマドウマ科》

方言

オカマビッチヨ	(青梅市)	カマギッチヨ	(奥多摩町)
イッケントビ	(福生市)	カガビッチヨ	(奥多摩町)
イゴ	(小菅村)	ウマ	(青梅市、羽村市)

カマドの隅など、薄暗いところにいる虫で、体に縞模様があります。模様のないものは、カマドウマです。

オカマビッチヨのビッチヨは、トカゲをカガミッチヨというのと同じで逃げ足の早いことを意味しています。

この虫の脚力は、イッケントビ（一間跳び）の名が証明してくれます。



## アオバズク

《フクロウ科》

### 方言

ホー (羽村市)

ホズッコ (小菅村)

ホーホードリ (小菅村)

アオバズクは、羽村市の鳥に指定された夏鳥です。フクロウの仲間、姿を見るよりは、声を聞いて到来を知ります。5月の連休ころから鳴きはじめます。

夜間、ホーホ、ホーホと二声ずつ鳴くので、小菅村では、ホーホードリと呼んでいます。



イカル

《アトリ科》

方言

- ミノカサホシイ (羽村市)
- マメグチ (八王子市)
- マメマワシ (小菅村)

「蓑笠欲しい」といって鳴きます。鳥図鑑の鳴き方は「キーコキー」と書かれています。これでは漠然としていて初めての人には、サツパリ判りません。こんど、イカルの声をよく聞いてみてください。ミノカサホシイと聞こえるはずです。

鳥の聞きなしは、いろいろありますが、ちなみに、「焼酎一杯グイッ」と鳴くのは、センダイムシクイ。「仰々しい仰々しい」と鳴くのは、オオヨシキリ。最近では「サツポロラーメン、ミソラーメン」と鳴くホオジロもいます。



## コノハズク

《フクロウ科》

### 方 言

- カッキントン (奥多摩町、小菅村)  
 カッキントウ (小菅村)  
 ゴキトウドリ (青梅市御岳、檜原村)  
 エボ (青梅市御岳)

知る人ぞ知る声のブッポウソウです。御岳山では、「ご祈禱、ご祈禱」と聞こえるとか。

奥多摩町日原のコノハズクは、カッキントンと鳴くそうです。

御岳山でエボというのは、意味不明です。



ジョウビタキ

《ヒタキ科》

方言

モンツキ (羽村市、秋川市、八王子市)  
 バカッチョウ(奥多摩町) バカッチョ(羽村市、秋川市)  
 ダンゴショイ(奥多摩町小菅村)ダンゴセイ (奥多摩町)  
 ヒッカタ (羽村市) ダンゴッチョ(八王子市、他)

冬、ジベリア方面から渡って来るといわれています。スズメなどに比べ、人間に対して警戒心もなく、ヒツヒツカタカタッと鳴くので、ヒッカタと呼ぶところがあります。

モンツキとダンゴショイは、羽についている白い斑紋を着物の紋付きや、団子に見立てたものです。

縄張り意識が強い鳥で、自動車のフェンダーミラーに写った自分の姿に敵対しているのを見たことがあります。こんなことをする鳥なので、バカッチョウと呼ばれるのかもしれませんが。



## ウグイ

《コイ科》

### 方言

- |         |                |
|---------|----------------|
| ハヤ・ホンバヤ | (羽村市・福生市、日の出町) |
| クキ・クキバヤ | (羽村市、福生市)      |
| クキツパヤ   | (秋川市)          |
| アカツパヤ   | (小菅村)          |
| ハヤメド    | (奥多摩町)         |
| モロコ     | (小菅村)          |

多摩川流域でウグイと呼ぶ人はいません。ハヤが通り名です。ウグイによく似たオイカワ(ヤマベ)は、バカツパヤといい、ホンバヤに対してワンランク下に見られています。産卵期に婚姻色が出て、赤っぽくなったものをアカツパヤとかクキツパヤと呼んでいます。



## カジカ

《カジカ科》

### 方 言

カジツカ（羽村市、立川市、青梅市、八王子市、福生市）

カジー（八王子市）

オオマラカジー（小菅村）

カエルのカジカではありません。

川魚のカジカは、頭が大きくてグロテスクですが、食しては美味。特に、多摩川上流の丹波川あたりの小形のものが美味しいそうです。

冬、大きな石の下に小さな卵をたくさん固めて生み付けます。泡状なので、泡子がなまって「アアコウ」といいます。





ホトケドジョウ

《ドジョウ科》

方 言

オババ・オババドジョウ (羽村市)

ババス (秋川市)

オダブ(日の出町)

かつて、羽村付近の多摩川では、岸辺の石の下には必ずと言ってよいほどホトケドジョウがいました。オババドジョウと呼んで小さな子供の遊び相手程度で食べることをしなかつたためか、だれもとる人はいませんでした。

ホトケドジョウは、環境指標種とされています。多摩川をオババが住める環境にしてあげたいものです。

ところで、日の出町のオダブの意味は、ほっそりしたシマドジョウに対して、やや太めなので、つけられたものです。オババもオダブも女性には、嫌われそうな言葉です。



サンショウウオ

《サンショウウオ科》

方 言

- |          |           |
|----------|-----------|
| ヤマカジ     | (八王子市)    |
| ヤマカジカ    | (奥多摩町)    |
| ヤマツカジカ   | (檜原村、小菅村) |
| サンショツカジカ | (奥多摩町)    |

ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオなど、山地の溪流にいるものをヤマカジカとかヤマカジーと呼んでいます。山のカジカという意味で、黒焼きにして食べたり、漢方薬や民間薬として取引されたそうです。

トウキョウサンショウウオは、比較的開けたところにも棲息していますが、ハコネサンショウウオなどは、山奥に入らないと見ることはできません。



## トカゲ

《トカゲ科》

### 方言

カガミツチヨ（羽村市、秋川市、立川市、青梅市、八王子市、多摩市、日野市、奥多摩町）

カガビツチヨ（奥多摩町）

カマギツチヨ（奥多摩町）

体の表面が青く光る不気味な小動物です。カガミツチヨという名前も、体の輝きに起因しているものと思われます。

子供のころ、カガミツチヨを見ると手が腐るといって指きりというお呪いをした覚えがあります。

ところで、多摩地域の広い範囲でカマキリをトカゲと呼んでいますが、物の影に落ちていて、獲物を捕らえる習性から、このような名前がつけられたのではないのでしょうか。



ヒキガエル

《ヒキガエル科》

方言

オオヒキ	(八王子市)
ゴトウベエ	(八王子市)
ゴトンベエ	(小菅村)
イボゲエロ	(奥多摩町)
イボタ・エボタ	(八王子市)

通称、イボガエルとかガマガエルと呼ばれています。早春、庭の池などに細長い寒天状の卵を生み、オタマジャクシは、オタマッコなどと呼ばれています。

八王子市のゴトウベエは、人の名前を連想しますが、意味が判りません。

## 動植物方言調査にご協力を

多摩の方言では、虫のカマキリをトカゲといい、爬虫類のトカゲは、カガミツチョといいます。

また、ネコヤナギも、エノコログサも、マタタビも、方言では、ネコジャラシといわれています。

あなたは、このような多摩独特の方言にまどわされたことはありませんか。

この小冊子は、多摩の動植物方言調査をより確実なものにするための資料として作成したものです。

一部は、写真入りで解説してありますが、多くは巻末に一覧表としてまとめてあります。

多摩の動植物の方言について、ご存じの言葉がありましたら、また訂正なども併せてご教示くださるよう、お願いいたします。

### 記

〒 190-11 東京都羽村市羽東 2-17-52

TEL 0425-54-5619

はむら自然友の会 岡崎 学

注：1992年10月から〒205に変更。

## 多摩の動植物方言一覧

## —木—

和名	方言名
アオキ	アオキシバ(日)、ダルマノミ(日)
アオハダ	ヒトツバ(奥)
アサダ	アカザ(奥)、ツキデツポウ(菅)
アカシデ	アカゾロ(奥、日)、アカメゾロ(日、檜)、ソロ(八)
アカメガシワ	オガラ(八)
アキグミ	アズキグミ(羽)
アケビ	アクビ(羽、秋、奥、檜、八、立、丹)
アスナロ	ヒバ(日、奥)
アセビ	アゼミシバ(羽)、ウシコロシ(羽、日) アシビ(羽、日)、ブスゴウ(羽、奥、日) ウジコロシ(羽)、ネズミシバ(羽) アサメシバ(菅)、アセボ(羽、立、保、瑞、日) ダニシバ(檜)、ハコボレ(青)、シキビ(福、日)
アブラチャン	ズサ(奥、檜)
アラカシ	アカガシ(檜)
イタヤカエデ	ヘエタ(八、奥、菅)、ヘヤタ(日、檜)
イチイ	アララギ(奥)
イヌガヤ	ヘダマ(奥)
イヌザクラ	シヨンベンザクラ(奥)、ヘツピリザクラ(羽)
イヌシデ	シロゾロ(奥、日、檜)、アノゾロ(日)、ソロ(奥)
イヌツゲ	ダンゴノキ(羽、福、青、日、府、立、野、奥、檜) ダンゴサシノキ(秋)、ダンゴサシ(府)、ヘダマ(奥) マエダマノキ(府)、ダンゴバラ(檜)、マイダマギ(青)
イヌブナ	クロブナ(奥、檜、日)、ムラダチ(奥)

和名	方言名
ウグイスカグラ	グミ(羽、八、青、立)
ウダイカンバ	ウデエ(奥)
ウツギ	オツギ(羽、秋)、シャボンダマノキ(奥、檜) サキヤアギ(国)
ウラジロガシ	シロガシ(檜)
ウリカエデ	ユワウリ(奥)、ウリノキ(檜)
ウリハダカエデ	ウリノキ(奥)
ウワミズザクラ	シオンベンザクラ(奥)、ヘッピーリザクラ(羽)
エゴノキ	ヨゴノキ(羽、立、秋、福、日)、エゴ(羽、府、国、日)、シャボンノキ(秋、青)、セッケンノキ(羽、秋)、シャボングサ(檜)
エビズル	エブズル(奥)
オノオレカンバ	ミネバリ(奥)
オヒョウ	ナメズク(奥)
カシワ	オカシワ(青、羽)、カシワボ(檜)、カシワモチ(福、日)
ガマズミ	ヨソドメ(羽、青、秋、奥、日)、ヨソド(檜)、ヨツドメ・ヨツドドメ(瑞)、ヨツド(奥)、ヨソヅ(奥)、ドドメ(狛、多)
カマツカ	ウシコロシ(羽、八、檜、日)
キハダ	サンゼンソウ(奥)
キブシ	マメンブシ(奥)、マメブシ(檜)
キョウチクトウ	ボンバナ(羽、瑞)
クサギ	トウノキ(八、奥)
クサボケ	シドメ(羽、福、八、多、府、国、青、秋、瑞、檜、日)、チドメ(奥)、シドミ(府、狛)

和名	方言名
クズ	クズフジ(丹)、クズマク(羽、青、秋)、クズバ(檜)、カズラ(奥)
クヌギ、コナラの実	ジンダンボウ(羽、秋、立)、ジンダンボ(田、多)
クマシデ	タニガシノロ・ウバアノロ(奥)、アノロ(八、日、奥)
クマノミズキ	カタスゴ(奥)、カタソゲ(八、檜)
クロモジ	ヨウジノキ(羽、立、青、日、檜)、クロモンジ(八、檜、日、奥、菅)
クワ	クワゼ・クワゼンボウ(羽、立)、クワデ(羽、国、多、秋、福、檜)、クワゼ(多)、クワデンボウ(羽、秋、福、青、瑞、多)
クワの実	ドドメ(羽、府、多、青、昭、秋、立、福、保、国、瑞、檜、奥、日)、ドドミ(府)、クワイチゴ(奥、丹)、クワドドメ(多)
ケンポナシ	ケンボロ(奥)
コウゾ	カズ(奥、丹)
コウヤボウキ	ハギ(八)
コシアブラ	イモギ(奥)
ゴシュユ	ゴショノキ(羽)
コバノトネリコ	フジキ(日、檜、菅)
サイカチ	ガラギッチョ(秋)
サルスベリ	ハダカギ(羽)、オボロ(青)
サルトリイバラ	タマンバラ(国)、マンジュツパ(八)
サルナシ	スイトウノキ(檜)
サワグルミ	カルメ(奥、菅)



和名	方言名
サワシバ	サアシバ(奥)、ウバアゾロ・ババアゾロ(奥)、ヤマシバ(檜)
サワラ	バリバリ・バリバリノキ(青、羽、福)、パチパチ(福)
シキミ	コウノキ(羽、立、福)、シキビ(福)、コウノハ(青)、コオツパ(福)
シナノキ	ナメズク(奥)
シャクナゲ	シャクナンギ(奥)
シラカシ	アオガシ(檜)
タカノツメ	イモギ(奥)
タマアジサイ	サワフサギ(日、奥、檜)
タラノキ	タラッポイ(奥、日、丹)、タラノメ(羽、青) タラッポ(日)、タラッポエ(日)、タラッポウ(菅) タランポ(八、日、福)、タランポイ(日、檜)
ダンコウバイ	イワズサ(奥、檜)
タンナサワフタギ	イシコリ(檜)
チドリノキ	アラゴ(檜)
チャボガヤ	ヘダマ(奥)、イスガヤ(奥)
ツクパネウツギ	ヒイコノキ(奥、菅)、マメツピイコ(菅)
テツカエデ	アラメ(奥)
ナツツバキ	サルスベリ(奥、菅)
ナツハゼ	ハチマキブドウ(羽)
ナワシロイチゴ	バライチゴ(羽)
ナンテン	ナリテン(羽、秋、瑞、立、国)、ナルテン(檜)
ニワトコ	アボヘボノキ(府、小)、カツンボ(清、国)、ニワツク(奥)

和名	方言名
ヌルデ	オツカド(丹)、フシノキ(丹、奥、日、檜)、カツノキ(羽、秋、青、日、丹、檜、八、奥、稻、菅)、シヨウノミ(羽)、シオノキ(檜、八、日)、カツンボイ(稻、府、多)、カツンボウ(檜、菅)、オカドンボウ(奥)、カザウルシ(多)、ヘエカキボウ(奥)、カツンボ(羽、秋、多、日)、カツンボウ(羽、八、多、檜、日、奥、菅)、カツデンボウ(府)、ノウギ・ゴマギ(檜)、ニンギョウノキ(奥)、チャンギリ(日)、チョンギリ(青)、アボヘボノキ(保)、シヨツパンノキ(日)
ネコヤナギ	ネコジャラシ(立、青、瑞、秋、檜)、ネコザラシ(羽)
ネジキ	アカンボウ(羽)、アカンボウノキ(檜、青、福)、カマネジリ(羽)、カシオシメ・カシウスミ(奥)
ネムノキ	ネプタ(羽、八、多、立、福、日、檜、奥、菅)、ネプタノキ(立、福)、オジギノウ(青)
ノブドウ	カガエビ(府、多)、カガイビ(多)、カガコビ(多)、カッテエビ(菅)
ハクウンボク	ヒトツバ(檜)
ハナイカダ	ママッコ(日、檜、奥、丹、菅)
ハリギリ	ボウダラ(奥、菅)、アクダラ(八、檜、奥)、セン(日、奥)、センノキ(日)
ヒイラギ	ヒイラゲ(羽)、オニオドシ(奥)
ヒノキ	バリバリ・バリバリノキ(青、羽、福)、パチパチ(福)
ビワ	ビヤ(羽)
フサザクラ	メメズツキ(奥)、メメズギ(檜)
フジ	マフジ(丹)
ブナ	シロブナ(奥)、ホンブナ(奥、檜、日)
チチブドウダン	アズキツツジ(奥)

和名	方言名
マサキ	ピーピーノキ(羽)、ピーピツパ(秋、瑞、立)、ピーピークサ(秋)
マタタビ	ネコジャラシ(奥)
マツの実	マツッコロ・マツツポグレ(羽)、マツツコグレ(瑞)、マツツポグリ(羽、福、八)、マツカサ(羽、秋、瑞)
マツブサ	ゴクエビ(丹)、ゴクノイ(奥、檜、菅)、ゴクノエ(菅)、マツブドウ(奥)、マツフジ(日)
マメガキ	アマメ(奥)
マユミ	マエミ(奥)
ミズキ	カギツチョ(府、狛)、キンカンボウ(府)、アカンボウ・アカンボウノキ(羽)、バツパギンコ(狛)、ハシノキ(奥)、カギツチョノキ(府、八)、カギツコノキ(府)、カギツコ(府)、カタギ(奥)、カギンチヨウ(青、立、羽、秋、瑞)、カギンチヨ・カギンチヨノキ(日)、ミズクサ(羽、八、日、檜、瑞、奥、菅)、ミズキ(檜)
ミツデカエデ	オガラベエタ(奥)
ミツバウツギ	ハシノキ(八)、カシクギ(檜)
ムクロジ	ムクレンジ(羽、青、檜、奥)、ムクレンズウ(羽、青、瑞)、ムクレンジュ(田)、ムクレンジ(立)、ムクレンズ(福)
メグスリノキ	カマネブ(奥)、カマネボ(菅)
モミ	モミソ(羽、青、秋、八、府、瑞、檜)
モミジ	ハナノキ(奥)
モミジイチゴ	キイチゴ(羽、青、瑞)
ヤシャブシ	アズマ(丹)、ヤシャ(奥、日)
ヤツデ	テンゴツパ・テンゴツパノキ(秋)

和名	方言名
ヤドリギ	ホヤ(奥、菅)
ヤマグルマ	モチノキ(奥、檜)
ヤマコウバシ	トロシバ(檜)
ヤマナラシ	ドロンボウ(奥)、ドロ・ドロノキ(奥)
ヤマハンノキ	ハンノキ(八、日、檜)
ヤマブキ	ツキノトウ(奥)、トウトウツキ(福、日)
ヤマブドウ	カマエビ(稲)、カガコビ(八)
ヤマボウシ	ヤマクワ(奥、日、檜、菅)
リョウブ	ビョウボウズ(奥)、サルスペリ(奥、日、檜)、 ギョウブ(奥、菅)、リョウボ(日)、リョウボウ(奥)

—草—

和名	方言名
アレチノギク	ピンボウグサ(立)
イタドリ	イッタンドリ(羽、秋、青、多、昭、府、八、立、国、 福)、イタンドリ(青、奥、檜)、スカンポ(府)、スツ カンポ(奥)
イヌタデ	アカマンマ(羽、立、府、野)、コンコンマ(瑞)
イヌビユ	ヒョウツパ(羽)、ヒョウナ(羽)、ヒョウ(丹)
イノコヅチ	ドロボウグサ(立)
イラクサ	エラクサ(府)、オロ(丹)
イワタバコ	イワナ(丹)、ユワナ(奥)
ウツボグサ	カゴソウ(羽、青)
ウワバミソウ	ミズナ(奥)

和名	方言名
エノヒエ	エノツペエ(奥、菅)
エノコログサ	ネコジャラシ(羽、府、青)
オオアレチノギク	ピンボウグサ(立)
オオバギボウシ	コレエ(八、丹)
オオバコ	オオバッコ(丹)、オンバク(羽、秋、八、多、立、奥、日)、オンバコ(羽、府、青、立、奥)、スモウトリグサ(府)
オオマツヨイグサ	ツキミソウ(羽、青、秋)
オキナグサ	ピンタボ(羽、秋、日、八)
オドリコソウ	ミツスイバナ(狛)
オノマンネングサ	ホウタルグサ(羽)、ホタルグサ(青)
オミナエシ	ボンバナ(丹)、オジュウゴヤバナ(八)
オヤマボクチ	ネエネンボウ(丹)、ネネンボウ(奥)、ウラジロ(奥)、ネネンボウ(檜、奥、菅)、ネネンバー(日)
カタバミ	ショツパグサ(八、立、府、奥)、トンボ(羽)、トンボグサ(八)、ミソツパ(羽)、スイツパ(青)
カヤツリグサ	マスグサ(羽、立、秋、八、府、瑞)、サンカクグサ(府)
カラスノエンドウ	スピーピー(昭)、シビピー(羽、府)、スピピー(羽、秋)、ピーピーグサ(府)、ピーピーマメ(府、国)、ツルマメ(府)、マメノキ・マメグサ(府)
カラスビシャク	ツチクイ(羽)、ツチクイババア(羽)、ヘベソ(羽)、ツチツクイ(秋)、ドロツクイ(瑞)、ヘソベ(青)、ヘンベソ(秋、奥、日)、ヘンベソウ(八)、ヘボン(稻)、ツチクイジジイ(立)、ドロクイバナ(府)
キケマン	ヘビクサ(奥、菅)

和名	方言名
ギシギシ	ウマギチ(羽)、ギシツパ(羽)、ギチツパ(羽)、ギチヨツパ(羽)、ダイオウ(府)、ギツチャ(秋)、ギツチヨツパ(立)、スイコウキ(八)
キツネノカミソリ	ワスレグサ(丹)、テツパレ(青)
キツネノボタン	コンペイトノキ(羽)、コンペイトウ(檜)
ギボウシ	ヤマオンバク(羽、青、八、瑞)、コウレエ(奥)、コオレツパ(菅)
クサノオウ	ドクグサ(奥)
クマザサ	クマンザサ(羽、秋)
ゲンノショウコ	リビョウグサ(羽、八、秋)、ジビョウソウ(丹)、イシャコロシ(福、羽、奥)、ジビョウグサ(檜)、イシヤイラス(立、府)、ビビョウグサ(日)
コウゾリナ	オトコタンポポ(羽)
コウヤボウキ	ハギ(八)
コニシキソウ	チチグサ(羽、青)
ジシバリ	ジガラミ(羽、立)、コゾウナカセ(羽)
シソ	チソ(丹、羽、多、青、奥)、キソ・キノツパ(羽、瑞、檜、立、国、青、奥)、キソ(多)
ジャガイモ	セエダ(八、檜、丹、菅)、ツルイモ(奥、檜)
ジャノヒゲ	カンタマゴ(羽)、カントンモモ(羽)、ジュウノタマ(檜、八)、ジュウノヒゲ(青)、リュウノタマ(稻)、ハタクサ(立)、ネコダマ(奥)
シュンラン	ジジイババア(羽、多、秋、青、瑞、奥、檜)、ジジババ(羽、日、多)、ホックリバアサン(稻)、ジジイババ(立)、ジジンバ(奥)、ジンジバンバ(多)、インダラ(奥)、ジンジイバッコ(八)

和名	方言名
スイバ	スカンポウ(立)、ツカンポポ(八)
スギナ	ジゴクツリ(羽)
スズメノテッポウ	ピーピーグサ(羽、福、立、青、府、秋、日、檜)、 ヨネグサ(府)
スズメノヤリ	シシイモ(羽)、シバイモ(羽)、セントイモ(日)
スベリヒユ	オテンキソウ(羽)、ヒデリグサ(立、府)、テリシラ ズ(府)、ヒヤクニチソウ(府)
セキショウ	メツパジキ(羽、昭、秋、立)
センブリ	トウヤク(羽、八、秋、青、奥、檜、丹)
タケニグサ	アサヤケ(八)、ササヤケ(奥)、スソヤケ(奥)、 ソソヤケ(奥)、ヨジームノキ(羽、立)
タニソバ	シシヤア(奥)
タンポポ	タッポ(羽)、タンポ(羽、秋)
チガヤ	ツバナ(羽、福、府、多、昭、秋、立、狛)、ボウコ (府)、ツバクロ(昭)、チャガ(稻、調、府、国)、ミ ゴ(奥)、アマナ(羽)、アマネ(羽)、アマンポウ(羽)、 ツバネ(羽、青、秋、福、瑞、日)、ツバメ(羽、立、 青、秋)
チカラシバ	ミチシバ(羽、青、立、府)
チョウセンアサガオ	キチガイナス(羽、秋)
ツチアケビ	ツチアクビ(丹)
ツメクサ	コゾウナカセ(羽、八)、ホタルグサ(府、八、立、瑞)
ツユクサ	ハナガラ(羽)、ハンナガラ・ハンナンガラ(奥)
ツリガネニンジン	トトキ(羽、青、檜、丹)
ツリフネソウ	コマノヒザ(奥)

和名	方言名
ツルボ	オシヨウロ(羽)
ツルマンネングサ	イシノボリ(羽)
トキンソウ	ベッタラグサ(府)、コゾウナカセ(羽)
ドクダミ	ジウヤク(羽、府、秋、青、立、国、保、瑞、奥)、 ジウワク(八、多)、イシャゴロシ(奥)
ナズナ	ペンペングサ(全般)、シャミセングサ(府、奥)、 シンデエカギリ(八)
ナンテンハギ	アズキツパ(羽)、アズキナ(羽)
ニワゼキショウ	ナンキンアヤメ(羽、瑞)
ネジバナ	ネジツバナ(羽)、ネジレツバナ(羽、青)、 ネジリツバナ(立)
ノカンゾウ (ヤブカンゾウ)	オダイリサマ(羽、立、青)、オダイリソウ(羽)、オ ダイリグサ(秋)、カジバナ(瑞)、カンソ(府、瑞、多)、 オカンソ(府)、ヘビショウブ(檜)
ノキシノブ	ソロバングサ(青)
ノコンギク	ジウサンヤバナ(奥)
ノビル	ヒル(青、丹、奥)、ノピロ(羽、立、秋、狛、檜、入)
ハコベ	ヒヨコグサ(立)、ヒヨウナグサ(立、八)
ハシリドコロ	ロート(丹)、ユキワリソウ(日、丹、奥、菅)、 キチゲエグサ(奥、日)、トコロ(奥)
ハルジオン	ピンボウグサ(府)、シンデエカギリ(日)
ヒエ	ヘエ(羽、秋、立)
ヒガンバナ	テクサレ(羽)、テツパレ(羽、青)、テツバナ(羽)、 ヘビバナ(奥)、シブツツバナ(府)、ヘビマクラ(奥)、 ミミダレグサ(立)、ハコボレ(羽、福、立、国、八、 日)、チチッカブ(奥)



和名	方言名
ヒメカンスゲ	フデ(青、羽)
ヒメジョオン	ピンボウグサ(府)
ヒメムカシヨモギ	シンダイカギリ(羽、秋、立)、ピンボウグサ(羽、秋、青、瑞、檜)
ヒレアザミ	ボケアザミ(奥)
ヒルガオ	チョコバナ(府、多、八、小、瑞、多)、アメフリアサガオ(八、青、羽、立)、ガジンボウ(羽)、ガズンボウ(瑞)、アメフリバナ(瑞、立、国)、オテンキソウ(青)
フキノトウ	フクノタマ(八)
フシグロセンノウ	ユウダチバナ(奥)、オゼンバナ(奥)、ボンバナ(奥)
フユノハナワラビ	カンワラビ(羽、瑞)
ヘクソカズラ	ヘットウズラ(羽)、ヘットズラ(羽、秋)、ヘットカズラ(瑞)、ヘックサリ(日)、ヘックサレ(日)、ヘクサズル(檜)、ヘックサズル(奥)、オキユウバナ(羽)、ヘットウカズラ(立)、ヤイトバナ(府)
ホウセンカ	コウセンコ(羽、立、入)、コウセンカ(青、檜)
ホタルブクロ	トツカンバナ(羽、福、昭、八、秋、青、狛、瑞、檜、立、国、日、奥)、チョウチンバナ(羽、瑞、立、多)、アンポンタン(多)、タツタツポウ(菅)、ポツカンバナ(奥)
ホトケノザ	ブルブルソウ(奥)
マツバボタン	オテンキソウ(青、羽、檜、立、多、八)
ミズヒキ	オコワ(羽)
ミノソバ	コンペイトウ(羽、秋)、コンペイトウノキ(立)、オコメ(青)

和名	方言名
ミソハギ	ボンバナ(羽、立)、オボンバナ(八)
ミドリハコベ	タイショウハコベ(奥)
ミヤマハンショウズル	ナベコロゲ(奥)
ミヨウガ	バカ(羽、立)
ムギワラ	ムイカラ(青、羽、秋、福、瑞、奥、日、国)、 ムイガラ(八)
メヒシバ	ハグサ(羽、立、秋、府、檜)
ヤエムグラ	クンショウグサ(府、福)、イトムグラ(奥)
ヤブガラシ	ヤブツカラシ(青、羽)
ヤブラン	オミキ(立)
ヤマゴボウ	カラッコ(奥)
ヤマノイモ	ヤマイモ(青、羽)、ヤメエモ(羽、秋)、テンゴウサ マ(羽)、トロイモ(立、羽、秋)、テングノハナ(立)、 ベンペンゴ(羽、立)、トロロイモ(羽)、ドンペラッ コ(瑞)
ヤマユリ	ヨロ(奥)
ヨメナ	ヨメナワ(丹)、ジユウゴヤバナ(奥)
ヨモギ	モチグサ(羽、秋、青、府、瑞、檜、奥、立、狛、多、 国、丹)、モグサ(羽)、クサノハナ(羽、秋、青、福、 八、稻、立、多、国、檜、奥、丹)
レンゲソウ	ゲンゲ・ゲンゲソウ(羽)
ワレモコウ	ポウズツパナ(羽、立)、ダンゴツパナ(瑞)、ポウズ グサ(立)、ポウズ(八)

## 一虫一

和名	方言名
アオバハゴロモ	ハトムシ(立)
アシナガバチ	アシツツルシ(立、福、八、青、羽、野、多、日、奥、菅)
アブラゼミ	オオゼミ(立、八)、アカゼミ(羽、福、日、檜)、 アカザ(青、奥)
アメンボウ	カニチ(立)、ミズスマシ(八)、トンビ(八)
アリ	アリンド(立、羽、青)、アリンコ(青、檜)、 アリンゾウ(檜)
ウスタビガの繭	ヤマガマス(日)、カラジッコ(菅)
ウスバカゲロウ	バケトンボ(八)、ヨウトンボ(奥)
ウスバカゲロウの 幼虫	テエチッコ(八)、イチッコ(八、野)、ヒツチャリム シ(八)、シリバサミ(奥)、カッコウ(奥)、カッコウ サマ(奥)、テックボ・テクボ(奥、菅)、アトビツシ ヤリ(檜)、ウシッコ(羽、福、秋、八、日、檜)、マ マッコ(檜)、オシッコ・アトヒツサレ(青)
ウスバキトンボ	シオカラ(菅)
ウマオイ	スイッチョ(八、羽、青、金、奥)
オオスズメバチ	オオフエンドウ(菅)、オオクマン(青)
オカダンゴムシ	マンジュウムシ(立)、ダンゴムシ(羽)
オニヤンマ	オオヤマトンボ(羽、福、日、青、奥)、オオヤマト ンブ(野)、オオトラトンボ(菅)、ミズツキ(菅)
カブトムシ	テングウムシ(羽)、クルマヒキ(秋)、セエカチ(八、 福、日)、ゴロタ(青)
カブトムシの幼虫	サズカリ(秋、立、羽、福、日)、ノケタ(菅)、マン ジュムシ(八)、ショウユダル(羽、瑞)、マゴタロウ (金)

和名	方言名
カマキリ	トカゲ(八、羽、福、立、青、日、奥、檜、菅)、カマイタチ(八)、オオガンボウ(奥)、ハエトリ(奥)、オタツバカバカ(青)、バカバカ(秋)
カマキリの卵	カラスノツバキ(八、羽、奥)、カラスノシズク(奥)
カミキリムシ	キーキームシ(八)
カメムシ	コブタ(八、福)、コブタムシ(日、奥)、クサムシ(秋、奥、菅)、ヘツピリムシ(立、日、奥、青)、ヘツクサボウズ(奥)
カラスアゲハ	カマクラチョウチョ(羽、福、八、日、奥、菅、青)、カマクラ(羽、青)
カワゲラ	イカダ(八)
キリギリス	ギツチョ(立、羽)、キイツチョ(八)、ギイツチョ(多)
ギンヤンマ	カアトンボ(奥)
クツワムシ	ガチャガチャ(羽、立、青、野、金、奥)
クマバチ	アマサケバチ(奥)、ダンゴバチ(野)
クロスズメバチ	ヘボ(菅)
クワガタムシ	サイカチ(羽)、ガジワラ(奥、菅)、ハサミムシ(青)
コオロギ	キリゾウ(立、奥)、キリユウド(八)、ケサノカカア(八)、オケサババア(檜)、カタサセスソセ(日)、オケサ(奥)
コガネムシ	エゾウ(立、奥)、カナブンブン(立)、エノ(八)
ゴキブリ	コウジンムシ・コウジンサマ(八)、アブラムシ(八)、カメチヨロ(日)
コメツキムシ	オタケ・オタケサン(狛)
※シオカラトンボ	♂バアトンボ(奥)、♀ジイトンボ(ムギワラトンボ)

和名	方言名
ジグモ	カンペイハラキリ(檜)、カンペ(立)、カンペ(八)、フクログモ(菅)、ハラキリグモ(狛、立)、サムライ(青)、サムライグモ(狛、立)、ハラアキレキンザブロウ(日)、キンザブロウ(福)
ジバチ	カガナキ(八)、アナバチ(八)
シャクガの幼虫	ピヤアムシ(八)
ショウリョウバッタ	ハタオリバッタ(立)
スズメガの幼虫	ニシハドツチ(羽)、ニシャアドツチ(日、福)、ニシドツチ(狛)
スズメバチ	フエンドウ(奥、羽)、オオクマン(八)、オオクマンバチ(立)、クマンバチ(野、日、福)、チュウクマン(青)
セミの幼虫	セミノコマ(羽)、セミウマ(八)
ツクツクボウシ	オオシンツク(八、羽、福、立、野、青、日、奥、檜、菅)、ホシツク(立)、ツクツクムシ(奥)
ニイニイゼミ	チッチー(羽)、ジージーゼミ(青、立)、チーチーゼミ(八、福、日)、ジージー(奥)、シーシーゼミ(奥)
コジュウヤホシテントウ	オカタムシ(菅)
ニワハンミョウ	ニワムシ(狛)
ノコギリクワガタ	ツノマガリ(八)
ハグロトンボ	オハグロトンボ・オハグロ(羽、八)、カワトンボ(八)
ハリガネムシ	アシガラミ(八、日)、アシガラミ(檜)、ユビカラミ(菅)、テマカリ(菅)、モテエムシ(菅)
ヒグラシ	カナカナ(立、羽)、ケツケ(羽、秋、奥)、ケツケツ(羽、福、青、奥)、ケテケテ(奥)、ツケツケ(奥、檜)
ヒゲナガカワトビケラ	マゴタロ・マゴタロウムシ(羽、福、日)、クロカアムシ(羽)、クロカワ(羽)

和名	方言名
ヒラタクワガタ	ヒラバン(菅)
ブユ	ブヨ(羽、日)
マダラカマドウマ (クラズミウマ)	オカマビッチヨ(青、羽)、カマギッチヨ(奥)、 カガビッチヨ(奥)、イゴ(菅)、ウマ(青、羽)、 イッケントビ(福)
マツムシ	チンチロリン(羽、金、八、立)
ミイデラゴミムシ	ヘッピーリムシ(多)
ミズスマシ	フウセンムシ(八)
ミヤマアカネ	クルマトンボ(奥)
ムカデ	ムカゼ(立、福、日、檜)、ハガチ(八、野)
ムギワラトンボ	ジイトンボ(奥) (シオカラトンボの雌)
ヤママユガ	ヤマンマイ(羽、府)、ヤマンメエ(福、日、菅)
ワタムシ	シロッコ(羽、福、秋、日、檜)、シラッコ(八)、 ユキンバ(菅)、シランバ(八)、ユキムシ(八)

※雌雄が入れ替わっている。

一鳥一

和名	方言名
アオジ	アオバカ(八)
アオバズク	ホー(羽)、ホッコ(日)、ホズッコ(菅)、ホーホード リ(菅)
アオゲラ・アカゲラ	ケラ(奥)
アカシヨウビン	メンドロロ(檜)、ビンドロロウ(菅)、ヒイヒヨン (奥)、ミズコイドリ(八)、ビンドロロ(奥)
イカル	ミノカサホシイ(羽、福、日)、マメグチ(八)、マメ マワシ(菅)、モンツキダカ(菅)

和名	方言名
ウグイス	バカッチョ(羽)、チャッチャツ(立)、ホケチョウ(奥)、ホウホケキヨ(福、日)、ミソチョ(青)
オオヨシキリ	カケシ(保)
カワセミ	カワガラス(八)、ショウピン(八、野)
キジバト	ヤマバト(羽)、ドバト(福、日)
キセキレイ	チチン(菅、奥、五)、セキリ(八)、チンチンカラカラ(日)
クマタカ	ボロツタカ・ホンダカ(奥)
コゲラ	マメゲラ(菅)
コジュケイ	コジツケ(羽、青、立、福、日、保)、チョットコイ(羽、福、日)、チョウセンキジ(立)、ヤマキジ(保)
コノハズク	カッキントン(奥、菅)、カッキントウ(菅)、ゴキトウドリ(檜、青)、エボ(青)
サシバ	ピッピーダカ(菅)、ヘンビー(菅)
サンコウチョウ	サンコウジジイ(八)、サンコチチ(保)
ジョウビタキ	ヒッカタ(羽)、モンツキ(羽、秋)、ダンゴッチョ(八、五)、ダンゴショイ(奥、菅)、ダンゴセイ(奥)、バカッチョウ(奥)、バカッチョ(秋、羽)、ヒッコタン(青)
チョウゲンボウ	ツルサリ(奥)
ツグミ	チョウマン(羽、立、奥、菅)
ツツドリ	ジゴクドリ(菅)
トラツグミ	ヒョウシン(奥)、ヒョーヒョードリ(菅)
ノスリ	マグソダカ(八)
ハイタカ	ヒョットウダカ(菅)
ハヤブサ	ホンタカ・ヘンビー(奥)

和名	方言名
フクロウ	ホッコ(秋、檜)、ホウツク(立)、オークポ(青)
ホオジロ	セツトウ(奥、丹)、ヒョツトウ(奥、菅)、 テッペンイチロクニシマケタ(福、日)
ホトトギス	ホウチヨツキツチヨ(菅)、テッペンカケカタ(立)、 オトノドツツキレ(福)
ミソサザイ	ミソツチヨ(羽、八、多、奥、日、五、菅)、ミソツ カチ(青)
ミミズク	ミズク(奥)、ズク(八)、ホッコ(八)
ヤマセミ	シラサギ・カワゲラ・ヘラベタ(奥)

一魚一

和名	方言名
アブラハヤ	アブラツパヤ(羽、福、日)、ニガツパヤ(八、菅)
イワナ	ユワナ(奥)
ウグイ	ハヤ・ホンバヤ(羽、福、日)、ハヤメド(奥)、クキ バヤ(婚姻色：羽、福)、アカツパヤ(婚姻色：菅)、 アカンバヤ(青)、モロコ(白色：菅)、クキツパヤ(秋)
オイカワ	バカツパヤ(羽、福、日、秋)、オコゼツパヤ(秋)
カジカ	カジッカ(羽、八、福、日)、カジー(八)、 オオマラカジー(10センチ以上のもの：菅)
カジカの卵	アアコウ(羽、福、日)
カマツカ	コトウ・オコト・コトウツパヤ(秋)
ギバチ	ギンタ(羽)、ゲバチ(多)、ギギ(多)
ホトケドジョウ	オババ・オババドジョウ(羽、秋)、オダブ(日)、 ババス(秋)



## —その他—

和名	方言名
アナグマ	マミ(奥)、ササグマ(奥)
カタツムリ	メアメアズ(檜)、マイマイズウ(青)、マイマイズ(立)、デンデンムシ(羽、日、奥)、メエメエズ(日)、メエモウス(福)
サンショウウオ	ヤマカジ(八)、ヤマツカジカ(檜)、ヤマカジカ(奥)、ヤマツカジー(日、菅)、サンショツカジカ(奥)
テン	テンマル(奥)
トカゲ	カガミツチヨ(羽、福、八、立、野、多、秋、青、日、奥、菅、檜)、カガピツチヨ(奥、菅)、カマギツチヨ(奥)
ナメクジ	デエロ(奥)
ヒキガエル	オオヒキゲエロ(奥、日)、ゴトウベエ(八)、ゴトンベエ(菅)、イボゲエロ(奥)、オオヒキ(多)、オヒキ(青)
ヒル	ヒールンボ(狛)、ヒール(奥)
ムササビ	オオバンドリ(奥)、バンドリ(奥、菅)、オバン(菅)、ザブトン(日)
モモンガ	コバンドリ(奥、菅)、コバン(菅)、モモンジー(菅)
モリアオガエル	アオガエル(奥)
リス	キネズミ(福、日)

## 研究協力者（敬称略）

石田 良実（羽村郷土研究会）

吉野万里子、山田半三郎、島田 勝美（はむら自然友の会）

## お世話になった方々（敬称略）

木村 寿郎、小沢 一彦、下田 茂一、中島 勝衛、  
原島 昭和、本沢陽一郎、小林 久夫、坂本 忠、  
石塚幸右衛門、奥秋 明治、保科 重永、守屋 忠之、  
山崎 義男、山崎ヨシ江、落合 功、藤本 辰也、  
加藤 源久、清水 善明、中島 恵子、亀谷 行雄、  
武士田 忠、尾島 俊夫

## 参 考 文 献

はむらの植物ガイド(羽村町教育委員会)、府中市史(府中市)、  
日野市史(日野市)、稲城市史(稲城市)、多摩町史(多摩町)、  
府中市自然調査報告書(府中市教育委員会)、府中市の口伝え集  
(府中市教育委員会)、調布市史(調布市)、小金井市誌(小金  
井市)、狛江市史(狛江市)、福生市の民俗(福生市教育委員会)、  
狛江・語りつぐむかし(狛江市)、青梅市の民俗(青梅市教育委  
員会)、立川の年中行事(立川市教育委員会)、立川のわらべ遊  
び・わらべ唄(立川市教育委員会)、多摩の年中行事(町田市立  
博物館)、奥多摩町誌(奥多摩町)、奥多摩町の民俗(奥多摩町  
教育委員会)、檜原村史(檜原村)、稲城市の民俗(稲城市教育  
委員会)、下保谷の民俗(保谷市)、国立の生活誌(国立市教育  
委員会)、福生市史資料編(福生市)、立川の方言(立川市教育  
委員会)、私の民俗誌(福生市教育委員会)、日の出町史(日の  
出町)、日の出町の年中行事(日の出町教育委員会)、丹波山村  
誌(丹波山村)、秋川の自然(秋川市)、鳥はともだち(五日市  
町郷土館)、東京の民俗(東京都)、定本市史青梅(青梅市)、八  
王子市史(八王子市)、暮らしの中の植物(みくに書房)、多摩  
の野鳥と野草(武蔵野郷土史刊行会)、八王子方言考(かたくら  
書店)、ふる里民俗誌(かたくら書店)、ふるさと東京民俗歳時  
記(朝文社)、多摩の方言と生活(教育報道社)、くらしぶり図  
絵(多摩書店)、秋川市の年中行事(秋多中PTA)

## あ と が き

今回の調査で動物や植物名の方言収集に終点のないことを知りました。なぜなら、現地赶赴、年輩者から草木や虫の方言を思い出していただくには、実物や写真、あるいは、長い会話の中で、ひょっこり飛び出してきたりするので、長期戦を覚悟で取り組まなければならないからです。

奥多摩から山梨県にかけては、方言も民俗行事も豊富で何度も通いました。ところが、都心に近くなるにしたがって方言や民俗行事を知る人がなく、やむを得ず文献に頼ることになりました。公共機関が発行した市町村史誌をはじめ、各種の文献は、動植物の名前に不確かなものがあり、さらに調査しなければならないものもあります。

終点のない調査とはいえ、より目標に近づくためにも、これからも調査を続けて行きますので、動植物方言の情報収集にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

なお、この「とつかんばな咲いた」のタイトルは、初夏の花、ホタルブクロの方言が多摩全域で、今も生きている言葉なので使いました。

著者略歴

岡崎 学（おかざき・さとる）

1940年1月1日東京都羽村市生まれ。

早稲田大学教育学部卒。日本自然保護協会  
自然観察指導員。東京都みどりの推進委員。

現在、中野区立歴史民俗資料館長。

とつかんばな咲いた

—— 多摩の動植物方言調査資料 ——

1992年7月31日発行

著者 岡崎 学

発行者 190-11 東京都羽村市羽東2-17-52

TEL 0425-54-5619

はむら自然友の会 岡崎 学

注：1992年10月から〒205に変更。

印刷 東京・中野 (株)新協



メグスリノキ